

七社遺跡 発掘調査報告書

県営ほ場整備事業（加治川地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 IV

2011

新発田市教育委員会

例　　言

1. 本書は、新潟県新発田市住田 525-1 番地ほかに所在する七社（ななやしろ）遺跡の発掘調査記録である。
2. 平成 21 年度の発掘調査は「県営ほ場整備事業（加治川地区）」に伴う本発掘調査であり、新潟県新発田地域振興局（以下、県振興局）から依頼を受けた新発田市教育委員会（以下、市教委）が調査主体となって実施した。調査体制は、第Ⅱ章 1 に記載した。
3. 整理作業と報告書作成及び印刷は、平成 22 年度に行なった。本事業に伴って実施した平成 18 年度の試掘調査、平成 19 年度の工事立会、平成 20 年度の範囲確認調査についても、同一事業・同一遺跡のため本書でその概要を記載した。
4. 本ほ場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書は、新発田市と合併する以前の旧「加治川村教育委員会」で 3 冊刊行しており、本書の副書名はそれに続けてⅣとした。
5. 平成 21 年度の本発掘調査と平成 22 年度の整理作業に要した経費は、農地整備担当部局（県振興局）が 90%，文化財担当部局が 10% を負担し、文化財担当部局分は新発田市一般財源と国庫（文化庁）及び県費補助金の交付によった。平成 18 ~ 20 年度の経費は新発田市一般財源で負担し、平成 20 年度の範囲確認調査については国庫（文化庁）及び県費の補助金交付を受けた。
6. 遺物と図面・日誌・遺構カード・写真ネガなどの記録類は、市教委で一括保管している。遺物の注記は、遺跡名を「七社」あるいは「七」と略記し、グリッド・遺構・層位・遺物番号・年月日を記した。遺物は注記と分類作業を終え、報告書掲載とそれ以外とに分けてコンテナに入れ、棚に収納してある。なお、報告書掲載遺物については、本書での通し番号を水色で追加記入した。
7. 本報告書の編集は田中耕作（市教委生涯学習課参事）が行った。執筆は、第Ⅲ章 3・4、第Ⅳ章 4、第Ⅴ章 1、第Ⅶ章、引用文献を笛澤正史（市教委生涯学習課臨時職員）、第Ⅵ章 2 と第Ⅷ章 1 のほかは田中である。
8. 黒書き資料の解説と赤外線写真撮影、及び第Ⅴ章 2 の原稿執筆は、浅井勝利氏（新潟県立歴史博物館主任研究員）に依頼し、写真データと玉稿をいただいた。
9. 第Ⅶ章 1 の自然科学分析（樹種同定）は、株式会社 古環境研究所に委託し、業務報告を本書に掲載した。なお、本章での表と写真図版は、目次とは別の独立した番号である。
10. 出土遺物の図化作業と観察表作成は笛澤が担当し、拓本・トレス・版下作成は、笛澤の指示で作業員が行った。遺構図等の編集は田中、トレス・版下作成は田中が作業員へ指示し行った。
11. 現場調査の写真撮影は各調査時の担当者が行い、遺物撮影と写真図版作成は田中が行った。試掘調査・工事立会を担当した市教委生涯学習課職員は、田中のほか、鶴巻 康志（埋蔵文化財係長）、鈴木 晓（主任）、本田祐二（文化財技師）、津田憲司（文化財技師）である。
12. 発掘調査から本書の作成まで、下記の諸氏・機関からご助言・ご支援を賜わった。記して感謝の意を表す次第である。（五十音順、敬称略）

相沢 央 浅井勝利 春日真実 小林昌二 國 雅之 滝沢規朗 田嶋明人 久田正弘 前嶋 敏

水澤幸一 望月精司 百瀬正恒 新潟県教育庁文化行政課 新潟県新発田地域振興局農村整備部

加治郷土地改良区 株式会社岩村組

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と立地	1
2 周辺の遺跡	2

第Ⅱ章 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯	4
2 遺跡の広がり	5

第Ⅲ章 県道南側の調査

1 試掘調査と工事立会の経過	6
2 遺構と遺物包含層	6
3 古墳時代の遺物	8
4 古代の遺物	18

第Ⅳ章 県道北側の調査

1 確認調査の経過と遺跡の範囲	22
2 本調査の経過	23
3 遺構	23
4 古墳時代と古代の遺物	26

第Ⅴ章 墨書き文字資料

1 墨書き土器と木簡	28
2 七社遺跡出土「九九」木簡について	(浅井勝利) 30

第VI章 自然科学分析

1 新発田市七社遺跡における樹種同定	(株式会社古環境研究所) 31
2 樹種同定資料について	32

第VII章 総 括

1 古墳時代前期の土器の時期と特徴	34
2 古代の土器の時期と特徴	36
3 まとめ	38

引用文献	40
------------	----

報告書抄録	奥付け
-------------	-----

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置	1	第 13 図 古代の遺物 (2)	20
第 2 図 遺跡の立地	2	第 14 図 県道北側のトレント位置と土層	22
第 3 図 周辺の主な遺跡	3	第 15 図 遺構全体図	23
第 4 図 遺跡の広がり	5	第 16 図 南半の遺構	24
第 5 図 県道南側のトレント位置と土層	7	第 17 図 北半の遺構	25
第 6 図 古墳時代の土器分類図	9	第 18 図 県道北側調査の遺物	26
第 7 図 古墳時代の遺物 (1)	10	第 19 図 墨書き土器と木簡	29
第 8 図 古墳時代の遺物 (2)	11	第 20 図 七社遺跡古墳時代土器資料と 時期対比資料	35
第 9 図 古墳時代の遺物 (3)	12	第 21 図 佐渡須恵器窯跡出土食器具の 変遷案	37
第 10 図 古墳時代の遺物 (4)	13		
第 11 図 古墳時代の遺物 (5)	14		
第 12 図 古代の遺物 (1)	19		

表 目 次

表 1 七社遺跡調査歴一覧	4	表 4 遺物観察表 (3) (県道北側の遺物)	27
表 2 遺物観察表 (1) (古墳時代)	15	表 5 遺物観察表 (4) (墨書き土器)	28
表 3 遺物観察表 (2) (古代)	20	表 6 遺物観察表 (5) (木製品・木簡)	28

図 版 目 次

図版 1 試掘調査	図版 7 古墳時代の土器 (1)
図版 2 工事立会	図版 8 古墳時代の土器 (2)
図版 3 範囲確認調査と本調査 (調査区南半)	図版 9 古墳時代の土器 (3)・古代の土器
図版 4 本調査 (調査区南半)	図版 10 墨書き土器と杯底部の調整・使用痕
図版 5 本調査 (調査区南半)	図版 11 柱と木杭
図版 6 本調査 (調査区北半)	

凡　　例

1. 平成 20 年の遺跡範囲確認調査まで、本報告書で扱った遺跡の範囲は、南に近接する「下山田道下（しもやまだみちした）遺跡」の一部と考えていたが、試掘・確認調査と工事立会での遺物出土範囲を検討した結果、下山田道下遺跡との間には遺跡の空白域が存在することが分かり、その範囲を分離し「七社遺跡」とした。
2. 旧加治川村では、大字が異なっても同じ小字名が存在しないという理由で、行政地名から小字を廃止していた。遺跡名とした「七社（ななやしろ）」は、以前あった小字名「七社道上・七社道下」に由来する。
3. 本遺跡は、東西に走る県道菅谷紫雲寺線を挟んで、南側が平成 18・19 年度の試掘調査・工事立会の範囲、北側が平成 20・21 年度の確認調査・本発掘調査の対象地である。本書では、この二者を第Ⅲ・Ⅳ 章とに分け記載したが、1～11 レンチは両者に共通するため、遺物説明と遺物観察表では試掘調査のレンチ番号を「試掘○T」または「試○T」、確認調査を「○T」と略記し区別した。
4. 地形図は、図の「天」が真北である。レンチ位置図や遺構図の方位記号は磁北を示し、磁北は真北から西偏約 7 度 20 分である。各地形図の出典は次のとおり。

第1図 1/50,000 新発田(平成 15 年 10 月 発行) 国土地理院

第2図 1/25,000 新発田(昭和 23 年 10 月 発行) 国土地理院

菅 谷(昭和 31 年 2 月 発行) 地理調査所

第3図 1/50,000 新発田(平成 2 年 12 月 発行), 中条(平成 3 年 12 月 発行) 国土地理院

第4図・第14図 1/2,500(平成 20 年 10 月 測図) 新発田市

第5図 1/1,000 加治川村地形図(平成 7 年 3 月 測図) 加治川村役場

5. 本発掘調査のグリッドの基点は、東西グリッド C・D 間、南北グリッド 20・21 間の交点の杭で、北緯 37° 59' 23", 東経 139° 22' 09" である。南北グリッド軸の方位は、磁北に対して N -30° 15' 10"-W である。水準原点は、県道と農道との交差点北側にある旧加治川村 4 級水準 7,464m を使用した。
6. 本発掘調査の遺構は種別ごとの連番で示したが、試掘・確認調査の遺構は大半が未掘であり、各レンチ内で番号を付した。また性格が確定しない遺構は、「溝状遺構・土坑状遺構」と用いた。
7. 遺構写真でスケールとして用いたピンボールは、直線部分が 50cm の長さである。
8. 土層の色観察には、小山正忠・竹原秀雄 1995 「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) を用いた。
9. 遺物写真的目的は、整形・調整・使用痕などの質感表現と考え、それに適合する大きさで表示しているため、縮尺を描えてはいない。木質遺物は劣化が避けられないため、調査終了後すみやかに撮影を行った。
10. 遺物は、調査別にかかわらず挿図・写真図版とも同一の通し番号で示した。

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と立地

新潟県新発田市は、新潟市の東方約25kmに位置する人口約10万3千人の地方都市であり、周囲には稲作農村地帯が広がっている。江戸時代初めに新発田藩初代藩主溝口秀勝が、城構築で選地したのが、越後平野に張り出した加治川扇状地であった。城下の発展とともに、住宅・商業域が集中する市街地を形成してきたが、車社会となつた現在、大規模な商業集積地が市街地周縁部に進出し、旧商店街は空洞化が目立っている。市域は、平成17年5月の市町村合併により拡大し、総面積は532.82 km²となった。最高所は標高2,128mの飯豊連峰大日岳であり、この分水嶺で山形県小国町と接する。飯豊連峰を源とする2級河川の加治川は、市街地の北方を流れて日本海へ入るが、元は海岸砂丘にはばまれて南西へ流れ阿賀野川へと合流していた。市域の最低所は藤塚浜海岸である。

七社遺跡は、市街地北東の市役所加治川庁舎（旧加治川村役場庁舎）南東250mに位置する（第1・3図）。庁舎の西には国道7号線とJR東日本の羽越本線が南南西—北北東方向に並走し、庁舎南の県道菅谷紫雲寺線は東へ向かうと遺跡内を横断して（第4図）山麓に達する。遺跡の東方には、国内最小の山脈として知られる櫛形山脈（最高地568m）が南北に連なり、唯一の峠である標高119.5mの箱岩峠をこの県道が越えて、坂井川とその形成による谷底平野に至る。かつての坂井川は、櫛形山脈に沿って南下し、山脈南端を巻いて現在の今泉川の流路をたどり北流。蒲原平野北部の低湿地形成の水源のひとつとなっていた。広大な低湿地には、江戸時代に干拓された塩津潟（紫雲寺潟）と称す潟湖が存在したが、青田遺跡での液状化による地震痕跡などの地形発達過程の研究成果によって、9世紀頃の大地震による地盤沈降に伴って拡大した潟の可能性が推定されている（高浜・ト部2002）。9世紀後半には、「日本三大災録」に残る貞觀5年（863年）の新潟县域大地震があり、この潟の形成に係わる大地震の有力な候補として注目される。本遺跡の営まれた平安時代前期以前には、まだ大規模な潟は出現していないようだが、第3図に横線トーンで示した砂丘内陸側の低地が、平地に流入し行き場所の限られた水による潟湖の様相をなしていたと推察されている（高浜・ト部2004）。



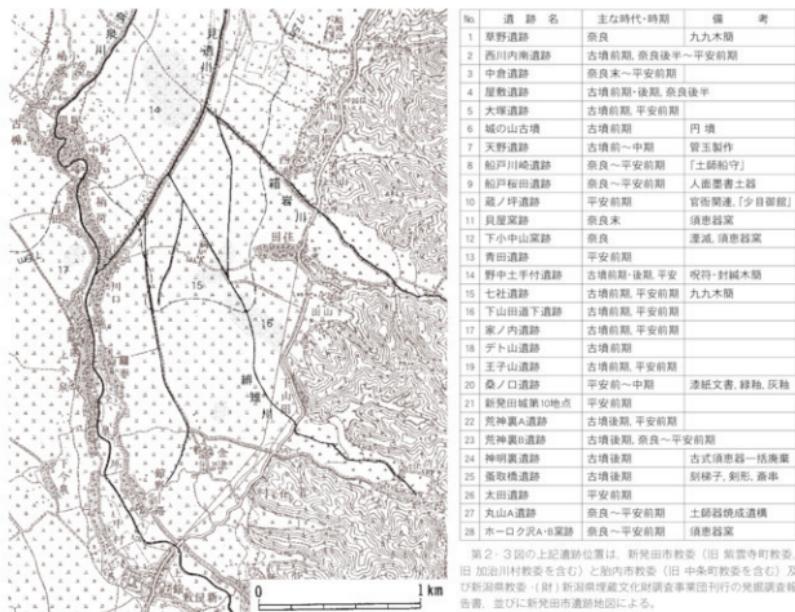
第1図 遺跡の位置

遺跡周辺の地形を昭和23年発行の第2図で示した。標高7.5mの等高線をみると、北流する今泉川（坂井川）が土砂を押し出して自然堤防を形成している。また、櫛形山脈から北西に開口する「若荷谷」の大きな沢から流れ出した緋塗（ヒツ）川は、ちょうど本遺跡部分を北西に流下しているが、等高線からは地形を削り開析する働きの強いことが分かる。本遺跡は、櫛形山脈から西へ延びる尾根の先端が沖積平野に形成した微高地（住田集落）の末端に立地する。各々の遺跡調査の結果、水田下に埋没した微高地の周りはガツボ（未分解腐植土）の堆積する湿地であり、幾筋かの小河川がこの微高地を開析・浸食することで、細長い島状の地形を多数形成していると想定できた。現況水田の標高は約7mである。遺構面の高さは、本調査を行った遺跡北端が最も高い。

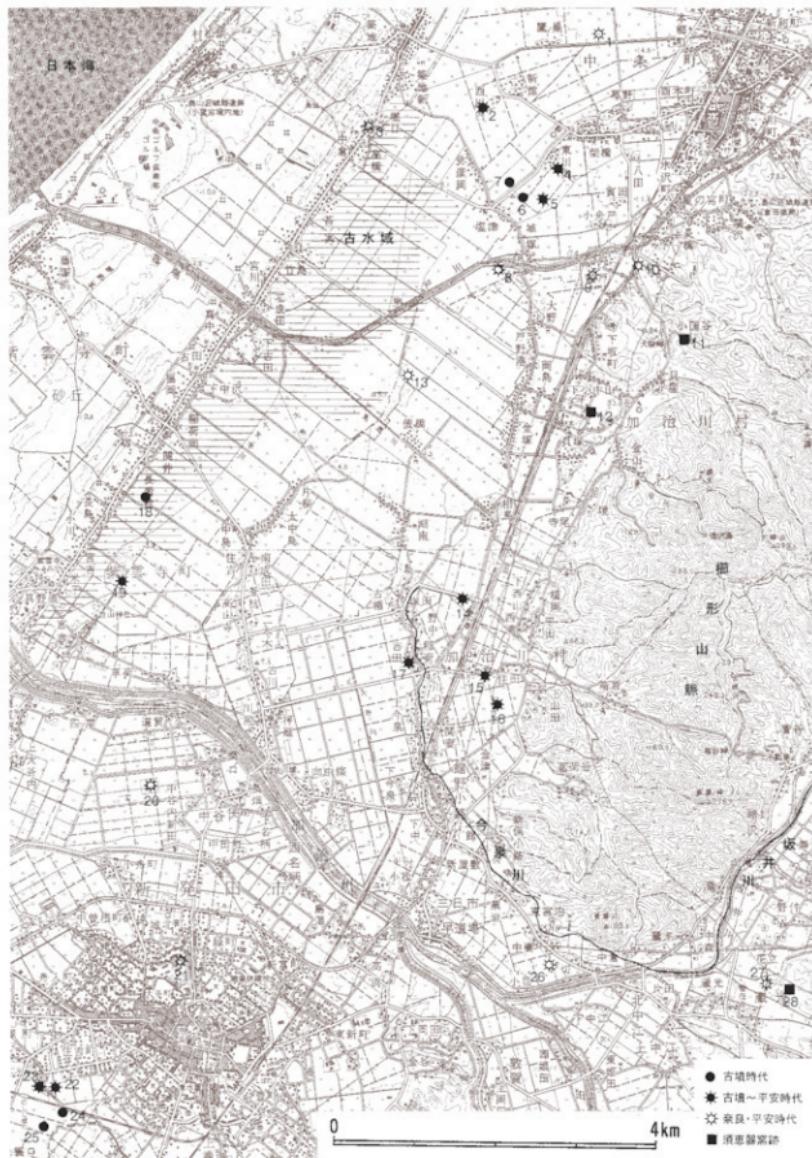
2 周辺の遺跡

本遺跡は、古墳時代前期と平安時代前期というふたつの離れた時代の痕跡を残す。第3図には古墳時代から平安時代までの主要な遺跡を示した。新発田市北西部から胎内市南部にかけての地域は、沖積平野に張り出した加治川・胎内川の扇状地と、櫛形山脈西麓の微高地、そして海岸砂丘列に囲まれた低湿地よりなる地形であり、扇状地扇端部、潟湖周辺や河川の自然堤防、砂丘の縁辺など、その地理的条件によって遺跡が立地・分布する。2頁の遺跡名と番号は、第2・3図に共通し、各遺跡の時代・時期の同定は、本書の分析成果に基づく。

さて、第3図で、低山地に立地する11-12-28の須恵器窯跡を除く遺跡の分布位置と地形を見比べる。2・4～9は胎内川扇状地の扇端部に相当し、湧水地帯である。21～25は加治川扇状地の扇端部に含まれられるが、調査結果を基に微視的にみれば、小河川が遺跡に隣接し流れている。3・18・19は砂丘。17・26は坂井川（今泉川）



第2図 遺跡の立地



第3図 周辺の主な遺跡

の自然堤防、10・27は山麓の緩斜面である。本遺跡を含む13～16・20は平地のただ中に見えるが、現在は平坦な水田下であっても13の青田遺跡が埋没した河川に面していたように、遺跡が選地された当時は微高地や河川等が存在した可能性を考えられる。

さて、遺跡一覧表で各遺跡ごとの分布や消長をみてゆくことにする。古墳時代前期（3～4世紀）で注目されるのは、城の山古墳（6）とその周辺に同時代の遺跡が集中している点である。本遺跡（15）の近くにも野中土手付遺跡（14）、下山田道下遺跡（16）、家ノ内遺跡（17）があり、海岸砂丘に近いデト山遺跡（18）、王子山遺跡（19）ともども、加治川以北の古墳時代遺跡は前期が多い。また遺跡存続の点では、古墳時代は前期で終わる遺跡が多く、中期まで継続するのは城の山古墳に隣接する天野遺跡（7）のみである。逆に中期や後期から始まる遺跡は多く、荒神裏A・B遺跡（22・23）や塗取橋遺跡（25）などがある、古墳時代前期と中期との間に画期があろう。

古代の遺跡を概観すると、藏ノ坪遺跡（10）で国司の関印が指摘される木簡「少目御船米五斗」が出土し、「津」の機能を持つ官衙関連遺跡として最も注目される。近隣の船戸川崎遺跡（8）、船戸桜田遺跡（9）も建物が川跡に面し、木簡・墨書き土器・祭祀具の出土もあり、藏ノ坪遺跡に先行する主要な集落といえる。これらの遺跡が集中する河川流域一帯は、律令政策上重要な機能を担う中核的地域と位置付けられよう。約5km南の野中土手付遺跡（14）、七社遺跡（15）、下山田道下遺跡（16）、家ノ内遺跡（17）などは、そこからの管理下で遺跡が営まれていたのであろう。本遺跡の九丸木簡は、その配下の下級役人の存在を暗示させる。なお時代を遡るもの、草野遺跡（1）からも九丸木簡が出土している。新発田城跡（21）は中世・近世の遺跡として著名だが、平安時代の遺構・遺物も出土し、加治川扇状地の微高地として早くから居住の好立地であったことが分かり、市街地形成の萌芽といえる。桑ノ口遺跡（20）は、漆紙文書・縁釉碗・灰釉皿の出土、四面庇付建物の存在から新田開発に伴う富裕層の居宅と考えられる。丸山A遺跡（28）は、最新の調査で土器焼成遺構と多量の焼損し須恵器が出土し、隣接するホーロク沢A・B窯跡（28）を経営する工人の集落と考えられる。遺跡存続期間という観点で平安時代を見ると、前期（9世紀）までの遺跡が18箇所もあり、中期（10世紀）へと続くのは桑ノ口遺跡のみで、この間に画期が存在するようである。

第Ⅱ章 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

試掘調査・工事立会は場整備事業の計画当初、現在の七社遺跡部分は周知の遺跡でなかったが、下山田道下遺跡が北方へ広がっている可能性があったことから、遺跡有無確認のための試掘調査を平成19年3月に実施し、古墳時代と平安時代の遺構・包含層を確認した。このことを踏まえ、新潟県新発田地域振興局農村整備部（以下、県振興局）、加治郷土地改良区、新発田市教育委員会（以下、市教委）の三者で遺跡取扱いの協議を行った。遺物包含層が深いことと、現況水田に大きな高低差がなかったことが幸いし、面工事は畔をならして表層の高さをそろえる簡易整地という方法をとった。また、排水路は現況水路の掘り直しと幅1m未満の掘削、用水はパイプ送水管の埋設であり、本発掘調査を必要としないため工事立会での対応とになった（第Ⅲ章1を参照）。

確認調査 平成20年10月に市教委は県道北側で確認調査を実施し、遺跡の広がりと遺物包含層の深さを把握した（第Ⅳ章1）。この調査結果を基に、前記の三者で遺跡の取り扱いと工事方法について協議を行った結果、遺跡範囲は保護盛土を行って水田の面工事を実施し、掘削幅が3m近い排水路部分は本発掘調査対応とすることで合意した。

表1 七社遺跡調査歴一覧

年度	調査種別	調査期間	調査面積	位置	備考
18年度	試掘調査	平19.03.09～03.19 5日間	163.0m ²	県道南側 レンチ34箇所	
19年度	工事立会	平19.09.10～12.06 21日間	1042.5m ²	▲ A・B・D水路	
～	工事立会	平20.02.28～03.07 7日間	310.0m ²	▲ E・F水路	
20年度	確認調査	平20.10.03～10.08 3日間	39.6m ²	県道北側 レンチ11箇所	
21年度	本調査	平21.08.20～08.31 7日間	110.0m ²	▲ 排水路工事	

なお、確認調査は下山田道下遺跡として実施したが、この調査結果と試掘調査・工事立会の内容を基に検討した結果、遺跡の広がりが第4図のように把握でき、下山田道下遺跡とは別な遺跡と認識した。

本調査 平成21年度の本調査に先立ち、県振興局は埋蔵文化財発掘の通知を平成21年6月3日付けで県教委へ提出した。また、平成21年7月23日付けで県振興局長と新発田市長が発掘調査費用負担契約を締結し、市教委は県教委への発掘調査着手の報告を平成21年8月5日付けで提出、8月20日から調査に入った。

本調査の対象地は遺跡北東端のため、調査範囲は限られると考えていた。調査の結果、過半を低湿地のガツボ層が占め、遺構の存在する微高地は予想以上にわずかであり、調査区内の湧水・浸透水も想定外に少なかった。これらの要因によって、計画よりも早く8月31日には現地調査を終了し(第IV章2参照)、平成21年10月9日付けで県教委への調査終了報告を行った。このように調査期間・経費とも大幅に減少したため、平成22年1月25日付けで調査経費負担金の減額変更契約を県振興局長と新発田市長との間で締結した。県振興局への発掘調査事業完了報告書は、平成22年3月16日付けである。

整理作業 平成22年度に、整理・報告書作成作業を実施した。試掘調査・工事立会・確認調査・本調査と、調査方法は異なるものの、ひとつの遺跡での同じ事業であり、さらに新潟県の歴史を語る上で重要な資料を含んでいることから、まとめて概要を提示することにした。県振興局長と新発田市長との発掘調査費用負担契約は、平成22年6月10日付けで締結し、平成23年3月18日までの事業実施である。

調査体制(確認調査・本調査)

監理 大滝 引(教育長)～22年11月	調査担当 田中 耕作(生涯学習課 参事)
〃 塚野 純一(教育長) 22年12月～	調査員 鶴巻 康志(〃 埋蔵文化財係長)21年度
〃 高澤誠太郎(教育部長)20年度	〃 渡邊美穂子(〃 主任)20年度
〃 土田 雅徳(教育部長)21・22年度	〃 笹澤 正史(〃 臨時職員)20・22年度
総括 杉本 茂樹(教育部生涯学習課長)	監督担当 渡邊美穂子(〃 主任)

2 遺跡の広がり

試掘調査・確認調査・工事立会は点と線による掘削であり、遺物出土位置と土層記録が遺跡の範囲を規定する。第5図と第14図で示した調査結果を基に、古墳時代と平安時代の遺跡範囲を第4図で想定した。県道両側の水田は、ほ場整備事業の除外地と休耕水田の畑作地、及び工場用地のため調査等行っていないが、おむね東西方向に長い範囲の遺跡である。これは第2図の地形図で、西へ延びた尾根の先端が住田集落の立地となり、さらに現水田下に埋もれた微高地の存在につながる。ただし、第5図の土層図のように、遺物包含層の高さに上下動があり、この微高地が平坦ではなく低地が入り組む複雑な形状を予想させる。第15図の微高地とガツボ層低湿地の関係からも、そのことが理解できよう。



第4図 遺跡の広がり

第Ⅲ章 県道南側の調査

1 試掘調査と工事立会の経過

遺跡の有無を確認するための試掘調査を平成19年3月に実施した。当時の排水路計画地に合わせる形で、法面パケット装着の0.25m級小型バックホーを用い、概ね1.3×3mのトレント（以下、「T」と略）を、東西方向の1～5T、20～34T、南北方向の6～19Tと掘削した。工事予定地の全域を網羅した調査ではなかったものの、古墳時代と平安時代それぞれの遺構と遺物を検出した。

工事立会を実施した水路工事は、表1(4頁)のように平成19年9～12月と平成20年2～3月の2時期に分けて行われ、埋蔵文化財係の専門職員が現地で記録作業を行った。第5図に試掘調査トレントと水路の位置、及び土層柱状図とその位置を示した。黒色が試掘トレント、赤色が工事立会の水路と区、土層図の位置である。

A・E・F水路はパイプ用水埋設工事、B-D水路は排水路工事で、B・C水路は現況水路の再掘削である。A水路はパイプ埋設に合わせて20mスパンで区切り、B-D水路は工事の丁張りを利用して10mスパンで遺物を取り上げた。この10～20mスパンを「区」と呼称する。遺物集中出土部分や重要遺物、そして遺構については位置やプランを略測した。F水路は遺物集中出土部分と土層記録箇所を「地点」として記録し、本書でもそのまま用いた。各地点の間は、「16～17地点」と記載した。なお、D水路は試掘20～33Tとほぼ重なる。

2 遺構と遺物包含層

土層

遺構や遺物包含層（以下、包含層）を確認したトレント・区・地点のうち、遺物が多く出土した主要な部分の土層柱状図を第5図に示した。細かな分層全てを含めると土層名が煩雑になることから、遺物観察表では省略し、古代の包含層はIV層、古墳時代包含層はVI層と統一して記した。砂・細砂・シルト・粘土といった土質は原地形を物語ることから、トーンにまとめて図示した。土色の観察には「標準土色帖」を用いたものの、天候や曇天時の明度、複数の調査者による微妙な同定のバラつきは否めず、必ずしも整合はとれていない。特に、シルト・粘性シルト・粘土という土質は、水分含有の差で粘性的認識に差が生じる。しまりの度合いも同様である。

試掘調査・工事立会での基本的な土層堆積は、ガツボ層（黒褐色未分解腐植土）とその再堆積による黒褐色粘質土が耕土直下にあり、暗灰色粘土やシルト層と続く。古代の包含層IV層は灰オリーブ色や暗黃灰色のシルト・粘質シルト・粘土であり、炭化物を含み、特に遺構では大粒で多量の炭化物が見られる。古墳時代の包含層は灰色粘土で、幾分オリーブがかるものの古代ほど濃くはない。炭化物を含むことは共通し、炭化物の集中検出は遺構の存在を察知することができる。

ほ場整備工事以前の地表水田面は、南東から北西に緩く傾斜しているが、各時代の包含層の深さは一樣ではない。これは、県道北側の本調査地区でも明らかのように（第15図）、微高地とそれを浸食する沢状の地形によって地山が波打っていると想定できる。砂層が厚く包含層も傾斜するF水路16・17地点（土層⑥⑦）は、ある程度水流のあった流路の堆積と考えられよう。

試掘調査

古墳時代では、10・11・15・16・28・32・34Tから溝と土坑状の落ち込みを検出した。両手に山盛り以上の土器が出土したトレントは、10・11・14・15・17・23・24・28・32・34Tであり、その中でも10・28・32・34

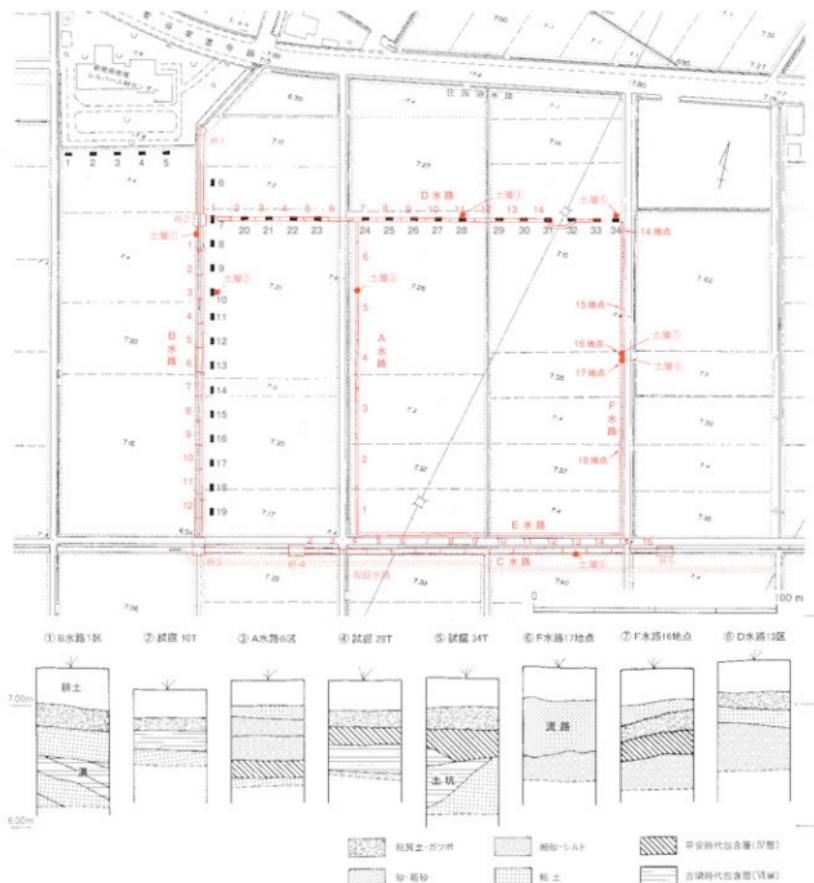
Tは平箱半分以上、特に34 Tの1号土坑からの出土個体が多い。北壁にかかった土坑の大きさは幅150cm以上、深さ45cmである。32 Tは破片量が多いものの、土師器甕が主体のため個体数は限られる。

古代の遺構は、2・3・20～22・26・27Tで溝と土坑状のプランを検出した。遺物は26 Tから多く出土したが、包含層を確認しても遺物が数点というトレンチが多数であった。

工事立会

水路ごとに包含層と遺構を概観してゆく。E水路からは遺物が出土していない。

A水路 2～5区では、地表下40～80cmに15～20cm厚の灰色粘土の古代包含層があるが、遺物量は少ない。6区のほぼ中間地点で、古代の土器が集中出土した。地表下45～75cmで、暗灰黄褐色粘土と粗砂が互層堆積し



第5図 県道南側のトレンチ位置と土層

た包含層である。なお、本水路での古墳時代の遺物出土はわずかである。

B水路 1区の1号溝から古墳時代の土師器が多量に出土した。多量の炭化物を含む暗灰色粘土の埋土で、溝は幅80cm前後、北西～南東方向に延びている。また3・4区の境目あたりで、地表下55～75cmの灰色粘土包含層から古墳時代土器が集中出土し、その上層の地表下30～55cmには暗黃灰色粘土の古代包含層がある。古代包含層は3区から始まり、南へ行くにしたがって薄くなり、7区中央でなくなる。10区から南はガツボ層が厚い。

C水路 幅3m弱の小河川の再掘削であり、川底・側面の泥さらいに近い。唯一の遺物(107)が9区北側壁面の擾乱層から出土した。なお、13区南方の切り回し仮設水路から、古代の遺物(105・106)が出土した。耕土直下の暗灰色シルト層上面で、位置関係から下山田道下遺跡の北端に相当する可能性が高い。

D水路 古代の遺物が2・3区から多く出土している。墨書須恵器「物」(150)は、3区に近い4区西端からの出土である。9～10区にまたがる幅4mほどの範囲から、古墳時代土師器が多量に出土した。20cm厚の炭混じり灰色粘土層である。11区は、多量の遺物が出土した試掘28Tに相当し、9～11区は古墳時代の遺物が集中する。

F水路 14～15地点にかけては、炭化物を多量に含む灰オリーブ粘質シルトの古代包含層を、地表下80～100cmという深い位置で検出した。16地点では、地表下50～75cmの暗灰オリーブ色粘土層の上部から、墨書須恵器「七」(151)と九九木筒が重なって出土した。16地点から約4m南に離れた17地点は、灰色の砂～粗砂に黒褐色土が薄く縞状に互層堆積しており、水成堆積の流路と推定できる。この16～17地点間の砂層から多量の古代遺物が出土している。16・17地点の土層図は東から見た状態であり、北から南へと粘土層・砂層の傾斜がみられ、流路の斜面に相当しよう。なお、出土遺物には水流による磨滅が認められない。

3 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、前期の土器がまとまって出土した。遺構と思われる落ち込みから一括出土したものもあるが、大半が包含層からの出土であるため、記述にあたっては器種分類にもとづいて説明する。

器種分類(第6図)

分類は、器種ごとに器形による区別をA B C D、細部の形状による区別を1 2 3 4、調整等による区別をa b c dとし、これらを組み合わせて表記した。ここでの分類は、大半が破片資料のため口縁部形状による区別にとどまるが、系譜がある程度特定できる場合は、その都度文中で触れる。

壺 A～G類に分類した。A類は無段口縁、B類は有段外反口縁、C類は有段内湾口縁の広口壺で、B類は頸部筒状で内面に明瞭な段がつくB1類。内面の段が不明瞭なB2類、付加状口縁にして有段口縁とするB3類に細分した。B1類は、いわゆる畿内系二重口縁壺に相当する。D類は、小形の有段口縁壺、E～G類は直口口縁壺で、口縁部が短く立ち上がるものをE類、内湾口縁をF類、有段口縁をG類とした。

甕 口縁部から頸部にかけての断面形状から、「くの字」状のA類、「逆コの字」状のB類に大別し、口縁形状とは別に鉢形のものをC類とした。A・B類は、それぞれ口縁部と口縁端部の形状・調整により細別した。A類は、外反口縁をA1類、外傾口縁をA2a類・口縁部ハケメ調整するものをA2b類、内湾口縁をA3a類・口縁部ハケメ調整するものをA3b類、外反口縁で口縁端部ハケメ調整をA4類、摘み上げ口縁をA5類、口縁端部面取りで下端を突出させるものをA6類。口縁端部面取りをA7類とした。B類は、摘み上げ口縁をB1類、口縁端部面取りをB2類、口縁端部を内折させるものをB3類とした。甕の口縁部の形状は、頸部のつくりと仕上げの調整方法によって規定されており、例えばB類にみられる断面「逆コの字」状の形状は、頸部を直立気味に立ち上げて口縁部上半の内面を広く強めにヨコナデすることにより形成されている。

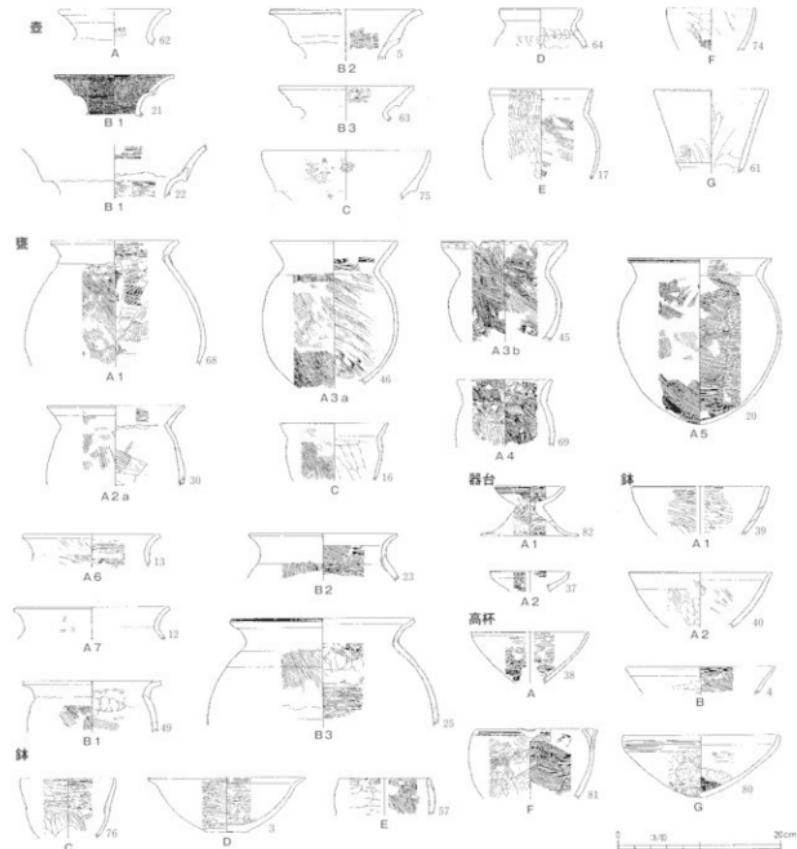
器台 小形で脚部径が受部径を上回るいわゆる小型器台である。受部口縁部を丸く取めるものをA 1類、摘み上げるものをA 2類、脚部が有段となるものをB類とした。

高杯 高杯は、杯部が内湾する形状のもの1例があるにすぎない。

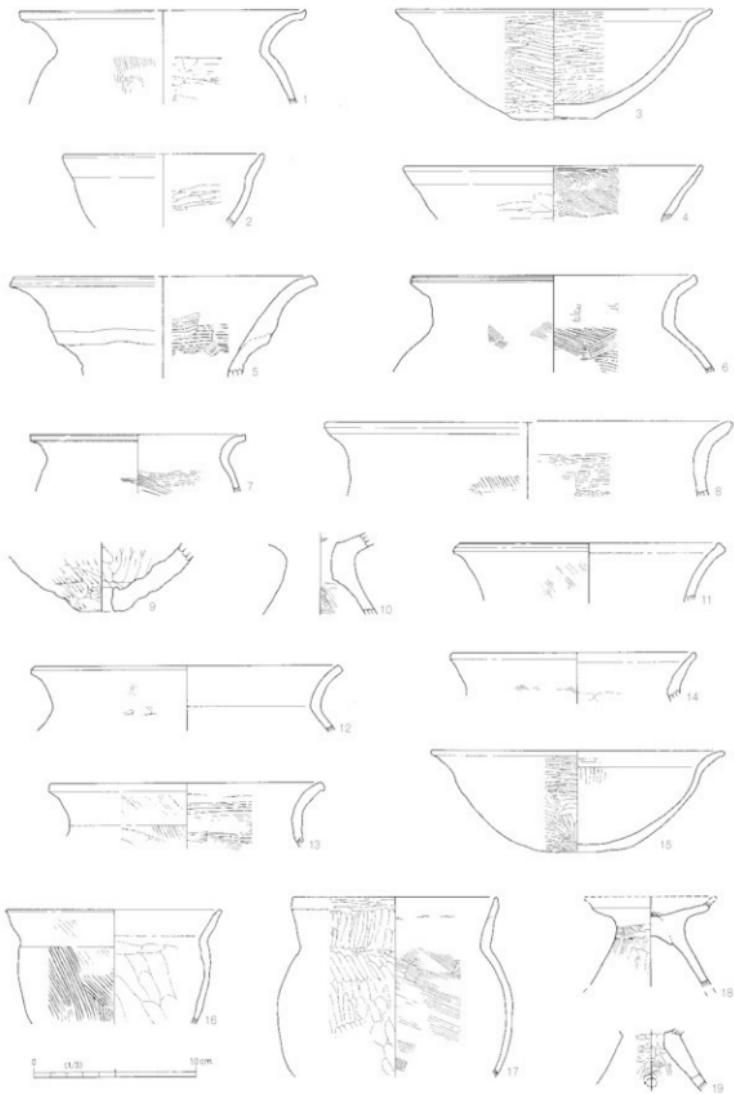
鉢 A～G類に分類した。ほかの小形器種に比べ、多様な器形がある。楕円形で内湾口縁をA 1類・外反口縁をA 2類、頸部で段を持つ内湾口縁をB類・内折口縁をC類、浅鉢形で外反口縁となるものをD類、口縁部が内湾気味に直立するものをE類、片口鉢をF類、底部穿孔鉢をG類とした。鉢類は、ヘラミガキ調整の有無により精製鉢と粗製鉢に分けられ、A 1・C・D類は精製鉢、A 2・B・E～G類は粗製鉢となる。

遺物各説（第7～11図、表2）

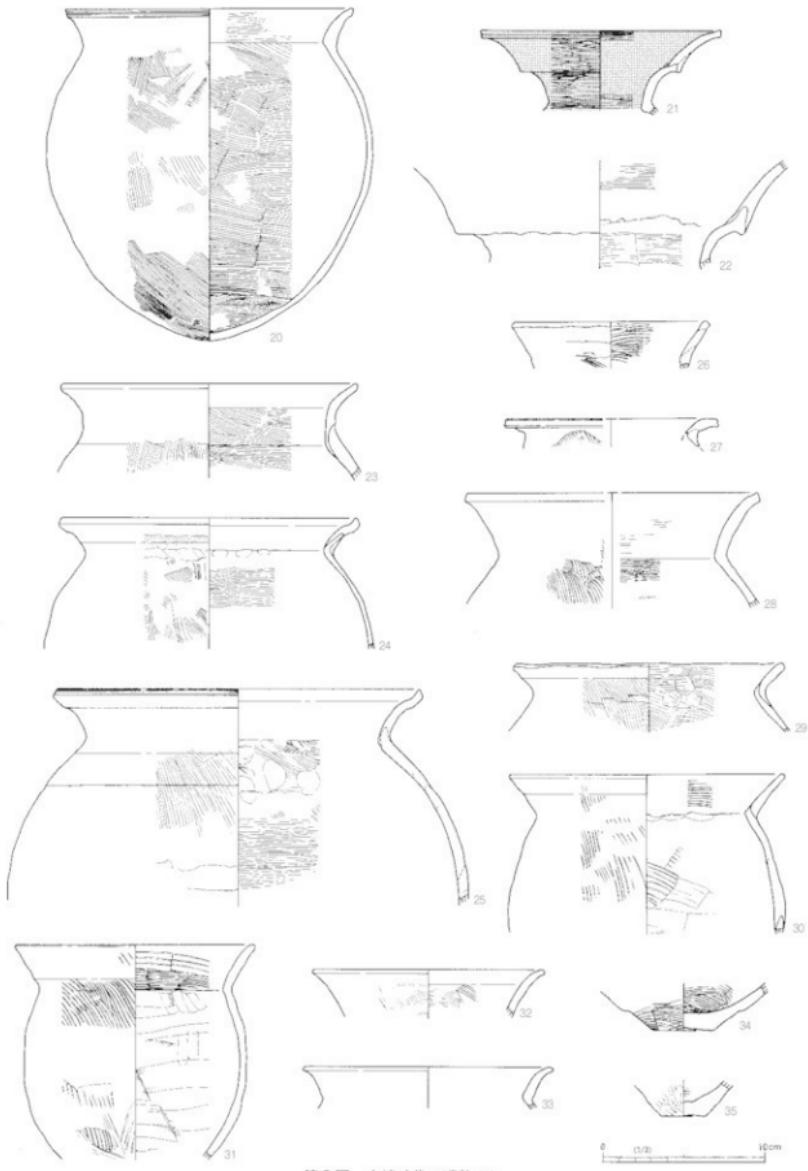
調査地点が入り組んで広範囲に及び調査の対応の仕方も異なることから、地点ごとに主な遺物について記述する。詳細については、遺物観察表を参照願いたい。



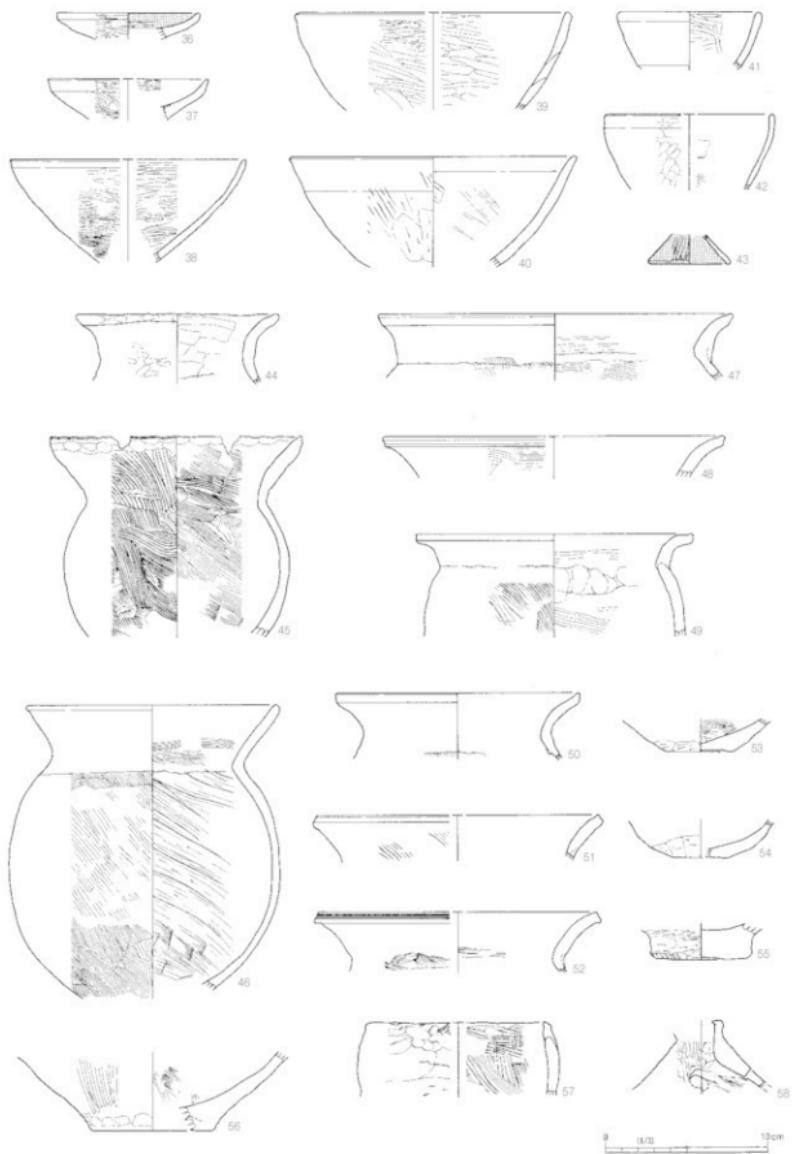
第6図 古墳時代の土器分類図 ($S = \frac{1}{6}$)



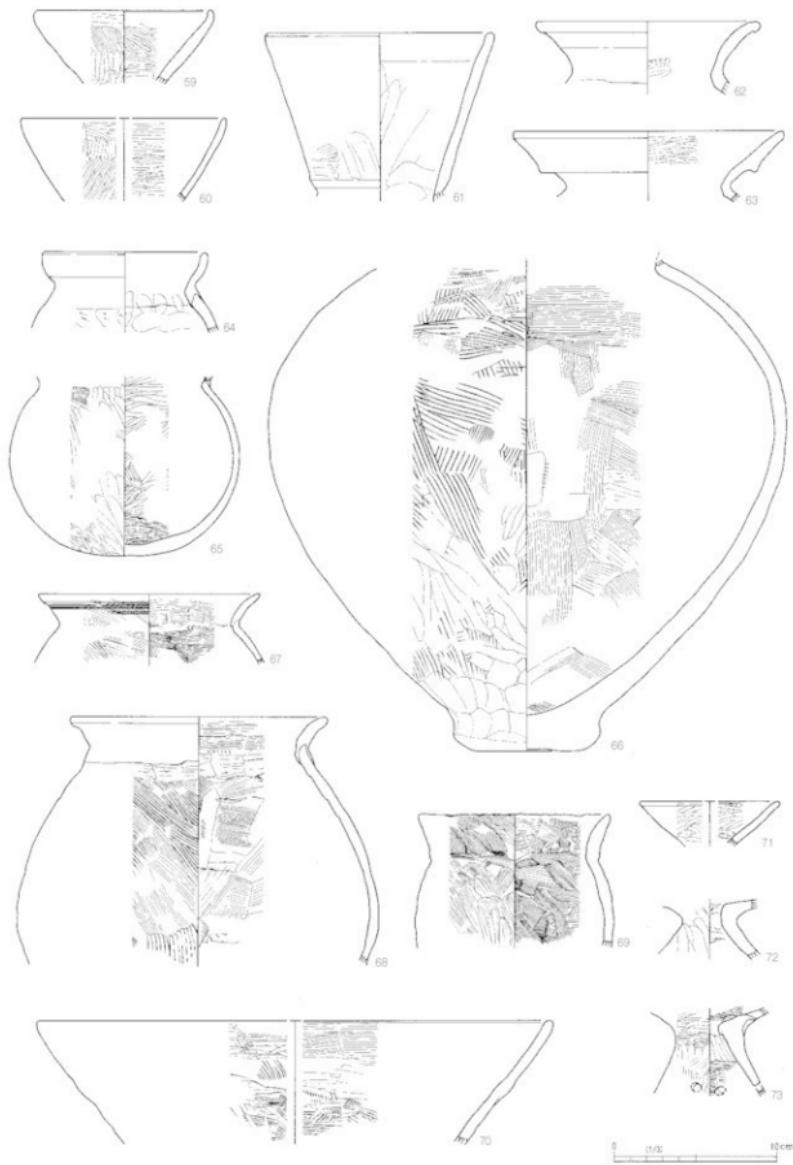
第7図 古墳時代の遺物(1)



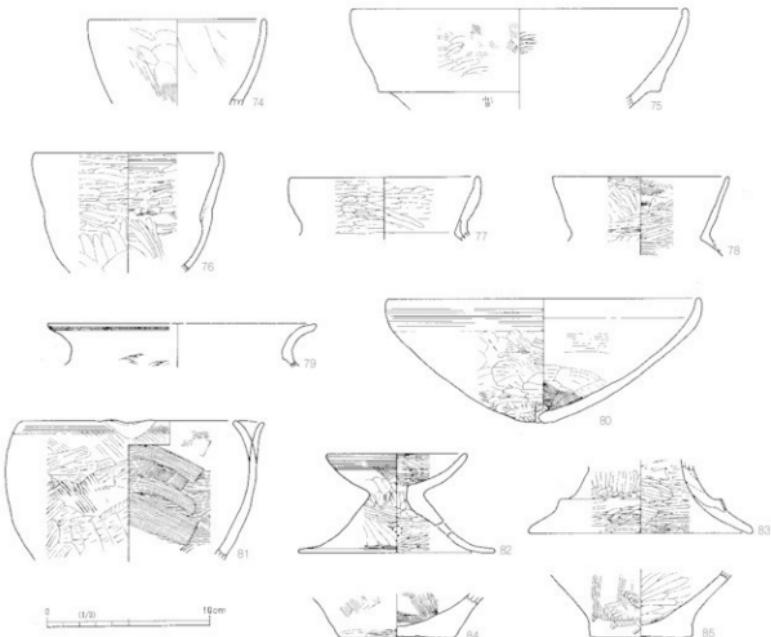
第8図 古墳時代の遺物 (2)



第9図 古墳時代の遺物 (3)



第10図 古墳時代の遺物(4)



第11図 古墳時代の遺物(5)

試掘 10 T すべて包含層資料である。小形器種が多い点が注目される。図化資料には甕B 3類(1)、鉢B類(4)、鉢D類(2・3)がある。鉢D類は、入念なヘラミガキが施された精製品で、胎土も精良である。

試掘 11 T すべて包含層資料で、出土量はわずかである。甕B 2類(5)、甕B 3類(6)がある。

試掘 15 T すべて包含層資料で、出土量は少ない。甕B類(7・8)、器台A類(10)、鉢G類(9)がある。

試掘 28 T すべて包含層出土物であるが、10 T同様小形器種が目立つ。甕はA類(11～14)の口縁端部を面取りするものが多い。小形器種は、15、17、19のように入念にヘラミガキ調整した精製品の割合が高い。

試掘 32 T 20は、唯一全形がわかる甕で、A 5類に分類される。口縁端部を摘み上げておりやや古い要素も見られるが、球洞・丸底であり、甕A 5類の中では新しい時期に位置付けられる。

試掘 34 T 1号土坑状遺構から、遺物がまとまって出土した。器種も豊富で、壺B 1類(21・22)・F類(42)・G類(41)、甕A 1類(33)・A 2a類(26・30・31)・A 2b類(29)・A 6類(27)・A 7類(32)・甕B 1類(28)・B 2類(23)・B 3類(24・25)、器台A 2類(36・37)、高杯A類(38)、鉢A 1類(39)・A 2類(40)と多様な器種構成である。21は、典型的な畿内系二重口縁甕で、内外面赤彩の精製品である。甕は、A・B類とともに胴部が球洞、または胴部最大径が中央付近にきて肩張りとならない器形で共通する。29は、口縁端部が波打ちハケメ調整の痕跡が明瞭であるなど長浜型近江甕と呼ばれるものに類似するが、45・69と口縁部の成形・調整方法が同一であり、近江系甕とは別に理解すべきであろう。器台・高杯は、それぞれ口径が10cm未満、14.2cmと小型であるが、つくりは丁寧

である。41は、わずかに口縁部の段が観察できる。鉢A類は、大きさ・形状がほぼ共通するが、39は精製、40は粗製と同器種内での明確な作り分けが認められる。古墳時代前期でも新しい時期に比定できよう。

B水路 1区1号溝状遺構から、遺物がまとめて出土した。破片資料が多いが、壺A類(44)・F類(59・60)・G類(61)、甕A3a類(46)・A3b類(45)・A5類(47・48)・A6類(52)・A7類(51)・B1類(49・50)、器台A類(58)、鉢E類(57)があり、甕A類の比率が高い点を除けば、34T1号土坑状遺構と類似した器種構成である。ただし、甕A・B類とともに口縁端部の幅が広く61の口縁部の有段部が明瞭であるなど、やや古相を示す。45は、胴部形状が46と共通するが、内湾気味に肥厚する口縁部の形状と胎土に雲母を大量に含み粗いハケメ調整のみで仕上げる点で、ほかの甕とは異質である。1区以外の遺物は、有段口縁の小形甕(64)や、胴部最大径が上半にあり肩張り器形となる甕(66)、やや大形の器台(73)など1号溝状遺構同様に古相を示す遺物があり、甕A類が多いなど、1区の遺物と同様の特徴が認められる。

D水路 10区包含層からまとめて出土した。図化できたものに甕が少なく小形器種が多い点は、試掘10T・28Tと同様の傾向を示す。ほぼ精製器種で占められ、復元率が高いことも同様である。D水路10区と試掘28Tは近接しており、限られた調査範囲内で小形の精製器種がまとめて出土している状況は注目される。遺跡の性格づけや時期比定する上で鍵となる土器群であろう。器種は、壺C類(75)・E類(77・78)、甕A5類(79)、器台A1類(82)・B類?(83)、鉢F類(81)・G類(80)があり、甕と中形以上の壺類が少ない。なお、83はほかの遺物との時期的な兼ね合いを考えると、有段口縁壺B2類とすべきか。

小結

七社遺跡の古墳時代の土器は、器種構成の点で大きく次の2群に分けられる。小形の精製器種が半数近くからそれ以上を占める鉢類が多い一群(試掘10・28T、D水路10区)と、甕が5割以上を占める中形以上の壺と小形の直口壺を含む一群(試掘34T、B水路1区)である。器種構成の違いは、甕に対する壺類と鉢類の比率差に起因している。しかしながら、各土器群に伴う甕類は、胴部が球胴形またはなで肩形である点で共通し、口縁端部の形状を除けば際立った違いは認められない。

以上の点から、七社遺跡の古墳時代前期の土器は、近接した時期の土器群と捉えられるが、B水路1区1号溝状遺構中の壺や甕類に古い要素が残存していると評価できれば、小形精製鉢類の共伴の有無が時期決定の判断材料の一つとなる。よって、B水路1区出土土器→試掘34T出土土器→試掘10・28T・D水路10区出土土器の変遷が想定でき、小形精製土器が一定量組成する資料をもつとも新しい時期に位置付けることができよう。

表2 遺物観察表(1) 古墳時代

*胎土の略称:長石、G=石英、水=水晶または高温石英、花=花崗岩、チャ=チャート、陶=陶色、粘=粘土粒、炭=炭化粒、青=青銅骨

No.	遺構	トレンチ	解剖	種別	器種	目測値(cm)	寸法 U断面 頭高 背幅	遺物度	成形・調製	色調	胎土	時期	備考	地盤	写真 現地
1	試10T	V1	上部器	甕B3	17.4	5.7	—	1/8	U:ヨコナデ、外:ヨコハラメ後ナデ、 内:ヨコハラメ	2.5YR7/2 7.5YR7/4 1m以下	4mm以下の長- 石・雲母 1m以下	古墳前期		—	
2	試10T	V1	上部器	鉢D	15.2	4.5	—	1/8	U:ヨコナデ、外・内:ヨコハラミガキ 内:ヨコハラミガキ	7.5YR7/4 1m以下	1m以下	古墳前期	精製		
3	試10T	V1	上部器	鉢D	19.2	6.7	5.0	1/6	U:ヨコハラミガキ、外:ヨコハラミ 内:ヨコハラミガキ、内:ナナメハケメ後ヨコハラ 内:ヨコハラメ	7.5YR7/4 1m以下	1m以下	古墳前期	精製・外:保 内:リムル	7	
4	試10T	V1	上部器	鉢B	18.2	3.3	—	1/6	U:ナデ、外:ヨコハラミガキ、内:ナナ メハケメ後ヨコハラメ	10YR8/3 10YR8/3 3m以下	精良、1m以下 の長・石 3m以下	古墳前期	粗軽、組入か	7	
5	試11T	V1	上部器	甕B2	18.2	6.0	—	1/8	U:ヨコナデ、ヨコナデ後ヨコハ ラメ	10YR8/3 3m以下	3m以下	古墳前期		—	
6	試11T	V1	上部器	甕B3	17.2	5.9	—	1/6	U:ヨコナデ、尾部ハケメ後内:ヨ コまたはナナメハケメ	10YR7/3 10YR7/3 2m以下	3m以下	古墳前期	外内面のハケ メ材異なる	7	
7	試15T	V1	上部器	甕B1	13.0	3.5	—	1/3	U:ヨコナデ、尾部圓錐状・外:内: ヨコハマエ	10YR6/2 2m以下	2m以下	古墳前期	組入か	—	
8	試15T	V1	上部器	甕B2	24.2	4.5	—	1/12	U:ヨコナデ、外:ナナメハケメ後ヨ コハケメ内:ヨコメハケメ	2.5YR7/2 4mm以下	4mm以下	古墳前期			

No	造構	トレンチ	解体	種別	器種	計測値(cm)		遺存度	成形・調整	色調	胎土	時期	備考	国司	写真 図版	
						LH	HG									
9	試15T	VI	上部帯	鉢G	-	3.4	2.6	1/2	外:ナメヘラケズリ内:ナテユビナダ	10YR6/3 に赤い黄鮫	7cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	焼成前穿孔	-		
10	試15T	VI	上部帯	器台A	-	4.3	-	1/2	外:ナテダム:ナテ後コハケ後ナタヘケ	10YR6/2 灰黄鮫	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	相製	-		
11	試28T	VI	上部帯	實A7	15.8	3.4	-	1/10	LI:コナデ:端部凹線状:外:ナタメハケ	7.5YR7/4 に赤い黄鮫	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	D水路11区に相当	-		
12	試28T	VI	上部帯	實A7	18.6	3.9	-	1/12	LI:コナデ:端部凹線状:外:ナタメハケ	7.5YR7/3 に赤い黄鮫	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	7		
13	試28T	VI	上部帯	實A6	16.6	3.6	-	1/12	LI:コナデ:外:ナタメハケ後ハケメダル:内:コハケメ	10YR7/3 に赤い黄鮫	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	7	-	
14	試28T	VI	上部帯	實A2	15.2	2.5	-	1/8	LI:コナデ:外:ナタメハケメダル:内: イオサエ	SYR7/4 に赤い黄鮫	2.5m以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	7		
15	試28T	VI	上部帯	鉢D	17.6	6.2	5.8	1/3	LI:コハケ後コハラミギキ:外: ナテヘルニアギキ後コハラミギキ:内: ナテヘルニアギキ	2.5YR7/3 灰白	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	精製:内:灰:外: 内:タール	-		
16	試28T	VI	上部帯	實C	13.0	7.0	-	1/6	LI:ナタメハケメダル:コハラミギキ:内: ナタメハケメダル:内:タラギキ	2.5YR8/2 灰白	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	7		
17	試28T	VI	上部帯	實E	12.4	11.0	-	1/3	LI:ナテ後コハラミギキ:外: ナタメハケメダル:内:タラギキ	10YR8/4 灰白	1cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	精製	-		
18	試28T	VI	上部帯	器台A2	-	4.9	-	3/4	LI:コタハメ:端部凹線状:外: ナタメハケメダル:内:コハケメ	7.5YR7/4 に赤い黄鮫	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-:やや粗製	-		
19	試28T	VI	上部帯	器台A	-	3.2	-	1/2	LI:コタハメ:端部凹線状:外: ナタメハケメダル:内:コハケメ	2.5YR7/2 灰白	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	-		
20	試32T	VI	上部帯	實A5	17.4	20.4	2.8	1/3	LI:コナデ:端部凹線状:外:ナタメハケメダル:内: コハケメ	7.5YR7/4 に赤い黄鮫	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	焼成丸底:腹肉薄	7		
21	1主	試34T	上部帯	實B1	14.6	4.9	-	1/6	外:ココハラミギキ	10YR6/2 灰白	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	二重口縁	-		
22	1主	試34T	上部帯	實B1	5.8	-	1/6	外:コナデ:内:コハケメダル:コハ	10YR6/3 に赤い黄鮫	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	二重口縁	-			
23	1主	試34T	上部帯	實B2	17.8	5.4	-	1/6	LI:コナデ:外:タハメハケメダル:内: コハケメ	10YR7/2 に赤い黄鮫	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	投入式	-		
24	1主	試34T	上部帯	實B3	18.0	8.0	-	1/6	LI:コナデ:外:ナタメハケメダル: イオサエ後コハケメ	7.5YR7/4 に赤い黄鮫	3cm以下の長・ 右:黒多:紫大量	古墳前期	精製	-		
25	1主	試34T	上部帯	實B3	22.0	12.9	-	1/6	LI:コナデ:端部凹線状:外:ナタメハケメダル: タハメハケメダル:内:押さえ後コハケメ	7.5YR6/2 灰白	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	-		
26	1主	試34T	上部帯	實A2a	11.6	2.8	-	1/12	LI:輪幅込後ナタメ:外:ナタメハケメ: 内:ココハメ	2.5YR6/1 灰灰	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	相製	-		
27	1主	試34T	上部帯	實A6	12.8	1.7	-	1/12	LI:コナデ:端部凹線状:外:ナタメハケ	10YR6/1 灰灰	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	-		
28	1主	試34T	上部帯	實B1	17.6	6.7	-	1/12	LI:コナデ:端部凹線状:外:タハメ: 内:ココハケメ	10YR7/2 に赤い黄鮫	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	-		
29	1主	試34T	上部帯	實A26	16.2	4.1	-	1/6	LI:ナタメハケメダル:内: タハメハケメ:内:押さえ後コハケメ	10YR7/2 に赤い黄鮫	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	U縁部ハケメ 調整:波打つ	8		
30	1主	試34T	上部帯	實A2a	16.6	9.7	-	1/2	LI:コナデ:外:ナタメタハケメ: 内:コハケメ	10YR6/2 灰灰	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	7		
31	1主	試34T	上部帯	實A2a	14.4	13.2	-	1/6	LI:タハメ後コハラミギキ:外:ナタメハ ケメダル:内:コハケメナダ	10YR6/2 灰灰	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	8		
32	1主	試34T	上部帯	實A7	14.0	3.0	-	1/6	LI:ナタメハケメ後コナデ	10YR5/1 灰灰	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	-		
33	1主	試34T	上部帯	實A1	15.2	2.6	-	1/6	LI:コナデ	2.5YR7/8 灰灰	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	-		
34	1主	試34T	上部帯	實	-	2.4	3.5	3/5	泥部分 内:コハケメ:内:致裂状ハケメ後 コハケメ	10YR6/2 灰灰	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	-	9		
35	1主	試34T	上部帯	實	-	1.9	2.6	3/4	外:ナタメハケズリ:内:コハケメ	10YR6/2 灰灰	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	既ハケズリ	-		
36	1主	試34T	上部帯	器台A2	8.6	1.6	-	1/6	外:内:ココハラミギキ	2.5YR6/3 に赤い黄鮫	5cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	精製:赤彩	-		
37	1主	試34T	上部帯	器台A2	9.6	2.5	-	1/8	外:内:ココハラミギキ	2.5YR7/4 に赤い黄鮫	5cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	精製	-		
38	1主	試34T	上部帯	高林A	14.2	6.3	-	1/8	外:内:ココハラミギキ	SYR6/3 に赤い黄鮫	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	精製:台付跡	-		
39	1主	試34T	上部帯	鉢A1	16.4	6.0	-	1/12	外:内:ココハラミギキ	2.5YR6/8 灰灰	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	精製	-		
40	1主	試34T	上部帯	鉢A2	17.2	6.8	-	1/6	LI:コナデ:外:ナタメハケメ後ハ ケメダル:内:テスリ:ナタメハケメ	SYR7/8 に赤い黄鮫	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	相製	8		
41	1主	試34T	上部帯	器A	8.4	3.5	-	1/6	LI:コタハメ:内:ナタメハケメ後ハ ケメダル:内:テスリ:ナタメハケメ	2.5YR7/3 に赤い黄鮫	3cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	精製	-		
42	1主	試34T	上部帯	器F	10.0	4.6	-	1/8	LI:ラナダ状のハラミギキ:内: ナタメハケメ	2.5YR7/4 に赤い黄鮫	2cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	相製	-		
43	1主	試34T	上部帯	台付A?	-	1.8	5.0	1/6	外:タハラミギキ内:ナタメハ ケメダル:内:コハケメナダ	10YR7/2 に赤い黄鮫	1cm以下の右	古墳前期	精製	-		
44	1満	B水路 1区	VI	上部帯	器A	12.0	4.1	-	5/6	LI:コナデ:外:ナタメハケメ後ハ ケメダル:内:ナタメハケメ	10YR7/2 に赤い黄鮫	1cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	東北系? 11号 部肥厚・波打つ	7	
45	1満	B水路 1区	VI	上部帯	器A3b	15.2	12.3	-	1/6	LI:端部オサエ:外:ナタメハ ケメダル:内:ナタメハケメ	10YR6/2 灰灰	5cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	既回復強化? ハケメ2種類	-	
46	1満	B水路 1区	VI	上部帯	器A3a	15.2	18.0	-	5/6	LI:タハメ後コハラミギキ:外:ナタメハ ケメダル:内:ナタメハケメズリ	10YR6/3 灰灰	4cm以下の長・ 右:黒多	古墳前期	既回復強化? ハケメ2種類	-	

No.	遺構	トレンド	解剖	種別	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・調整	色調	胎土	時期	備考	種別	写真 図版
47	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵A5	21.4	3.7	-	1/6	U:ヨコナデ, 外:タテハケメ, 内:ヨコハケメ	10YR8/2 9.0	4mm以下の長- 石-雲-灰	古墳前期		
48	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵A5	10.6	2.5	-	1/12	U:ヨコハケメ後ヨコナデ	10YR7/2 [に]い黄相	4mm以下の長- 石-雲-灰	古墳前期		
49	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵B1	16.8	6.2	-	1/6	U:ヨコハケメ, 鍵-ナメハケメ, 内:ヨビオサメ後ヨコハケメ	2.5YR8/3 灰黄	4mm以下の長- 石-雲	古墳前期		
50	B木路	VI	上跡部	鍵B1	14.4	4.0	-	1/6	U:ヨコナデ, 外:タテハケメ	10YR7/3 [に]い黄相	2mm以下の長- 石-雲-灰大量	古墳前期		
51	B木路	VI	上跡部	鍵A7	17.2	2.8	-	1/12	U:ヨコナデ後ヨコナデ, 端部凹彎曲	7.5YR7/3 [に]い白	2mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
52	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵A6	17.0	3.6	-	1/12	U:ヨコナデ, 外:タテハケメ, 内:ナメハ 内:ヨコハケメ	10YR7/2 [に]い黄相	2mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
53	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵	-	1.9	4.0	底部有 外:ヘカズリ	U:ヨコハケメ	5YR5/1 灰灰	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期	9	9
54	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵?	-	2.2	3.4	1/3	外:ヘカズリ, 内:ナデ	2.5YR7/2 灰黄	2mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
55	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵	-	1.8	5.6	底部有 外:ヘカズリ	U:ナデ	2.5YR7/2 灰黄	4mm以下の長- 石-チャ?	古墳前期		
56	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵	-	4.5	7.2	1/4	外:タテハラミガキ, 内:ナメハ 内:ヨコハケメ	2.5YR6/6 灰	1mm以下の長- 石多	古墳前期		
57	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵E	10.6	4.5	-	1/8	内:ヨビオサメ後ハナデ, 内:タテ ナメハケメ	10YR7/2 [に]い黄相	2mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 軽転し縦打つ ハケ2種類	8	
58	1 溝	B木路 1区	上跡部	器台A	-	2.7	-	3/4	外:タテハラミガキ内:脱粘状ハ ケ	10YR7/2 [に]い黄相	2mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 精製		
59	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵F	10.6	4.5	-	1/6	内:ヨコタテハラミガキ, 内:ヨコハ ミガキ	10YR8/3 灰黄相	2mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 精製		
60	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵F	10.6	5.1	-	1/8	外:ヨコタテハラミガキ, 内:ヨコハ ミガキ	10YR8/2 9.0	4mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 精製		
61	1 溝	B木路 1区	上跡部	鍵G	15.6	10.0	-	1/6	外:ヨコナデ後ハナデ, 内:ヨコナ デ-ビニテ	2.5YR7/4 灰灰	8mm以下の長- 石-雲少	古墳前期	8	
62	B木路	VI	上跡部	鍵A	13.4	3.8	-	1/6	外:ヨコナデ, 内:ヨコナデ-ハケメ	10YR7/2 [に]い黄相	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
63	B木路	VI	上跡部	鍵B3	16.4	4.0	-	1/4	外:ヨコナデ, 内:ヨコハラミガキ	10YR8/2 9.0	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
64	B木路	VI	上跡部	鍵D	9.8	4.7	-	1/3	U:ヨコナデ外:ヘカズリ, 内:ユビ ナデ	5YR7/3 [に]い白	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期	8	
65	B木路	VI	上跡部	鍵E	-	11.0	2.4	1/3	外:ハケメ後タテハラミガキ, 内:ハ ケメ後ハラミガキ	10YR8/2 9.0	1mm以下の長- 石少, 雲多	古墳前期 精製, 丸底		
66	B木路	VI	上跡部	鍵	-	29.6	9.0	3/4	外:ヨコナデハマハメ後ハナデ, 内:ヨコハマハメ後ハナデ	10YR6/2 灰黄相	1mm以下の長- 石少, 雲多	古墳前期 ハケメ2種類	10	7
67	B木路	VI	上跡部	鍵A1	13.4	4.2	-	1/6	U:ヨケメ後ヨコナデ, 外:ナメハ 内:ヨコハケメ	2.5YR7/2 9.0	4mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
68	B木路	VI	上跡部	鍵A1	15.4	15.2	-	1/6	外:ヨコナデ, 内:ヨコハケメ後ハ ケメナデ	10YR7/3 [に]い黄相	3mm以下の長- 石-雲-灰 チャ?	古墳前期	8	
69	B木路	VI	上跡部	鍵A4	11.4	8.2	-	1/6	U:ナデ後ハナデ, 外:ナメハ 内:ヨコナデヨコナメハ	2.5YR6/4 [に]い白	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 LI線被打つ	9	
70	B木路	VI	上跡部	鍵B	31.2	7.6	-	1/12	外-内:ハケメ後ヨコハラミガキ	10YR7/2 [に]い黄相	7mm以下の長- 石-花多	古墳前期		
71	B木路	VI	上跡部	器台A1	8.4	2.8	-	1/8	外-内:ヨコハラミガキ	10YR7/2 [に]い黄相	1mm以下の砂粉 -石-雲	古墳前期 精製		
72	B木路	VI	上跡部	器台A	-	2.8	-	1/2	外:ヨコハラミガキ, 内:ナデ	5YR7/6 8.0	1mm以下の砂粉 -角-雲	古墳前期 精製, 插入か	8	
73	B木路	VI	上跡部	器台A	-	5.0	-	1/2	外:タテハラミガキ内:ナデ-ヨコハ ミガキ	10YR4/1 灰灰	1mm以下の長- 石-雲	古墳前期 精製	8	
74	C木路 10区	VI	上跡部	鍵F	10.8	5.2	-	1/6	外:ハケメ後ハラミガキ, 内:ナ デ-ヨコハケメ	10YR7/2 [に]い黄相	2mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 やや粗製		
75	D木路 10区	VI	上跡部	鍵C	20.4	6.2	-	1/6	外:ハケメ後ヨコハラミガキ, 内: ヨコハケメ	2.5YR7/4 9.0	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
76	D木路 10区	VI	上跡部	鍵C	15.2	7.3	-	1/6	外:ヨコハラミガキ後タテハラミガ キ, 内:ヨコハケメ後ヨコハラミガ キ	3YS/1 9.0	1mm以下の長- 石少, 雲多	古墳前期 精製	8	
77	D木路 10区	VI	上跡部	鍵E	11.4	3.6	-	1/6	外-内:ヨコハラミガキ	10YR7/2 [に]い黄相	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 精製		
78	D木路 9区	VI	上跡部	鍵E	10.6	4.0	-	1/4	外-内:ハケメ後タテ-ヨコハラミガ キ	2.5YR7/2 灰	1mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 精製, 口以下保 留	8	
79	D木路 10区	VI	上跡部	鍵A5	15.5	2.6	-	1/6	U:ヨコナデ, 外:ハケメ	10YR7/3 [に]い黄相	3mm以下の長- 石-雲-灰	古墳前期		
80	D木路 10区	VI	上跡部	鍵G	19.0	7.6	2.4	5/6	U:ヨコナデ外:ハケメ後ハケメ スリ, 内:ヨコハマナメハマハケメ	2.5YR7/2 灰	3mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 焼成前穿孔	8	
81	D木路 10区	VI	上跡部	鍵F	13.0	8.6	-	4/5	U:ヨコナデ外:ナメハマハメ後ハ ケメズリ, 内:ヨコナメハマハメ	2.5YR7/2 灰	3mm以下の長- 石-花多	古墳前期 片口穿孔(付合)		
82	D木路 10区	VI	上跡部	器台A1	8.4	6.1	11.8	1/4	U:ヨコナデ外-内:ハケメ後ヨコハ ラミガキ	10YR7/3 [に]い白	1mm以下の長- 石少量, 雲多	古墳前期 精製		
83	D木路 9区	VI	上跡部	器台?	-	4.1	13.6	1/6	外:ヨコハラミガキ内:ヨコハ ケメズリ-ヨコハラミガキ	10YR7/3 [に]い黄相	4mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 精製		
84	D木路 10区	VI	上跡部	鍵	-	2.5	6.8	1/3	外:タテハメ, 内:ナメハ 内:ユビナメ	2.5YR6/6 灰	4mm以下の長- 石-雲多	古墳前期		
85	D木路 10区	VI	上跡部	鍵	-	3.9	6.2	1/2	外:タテハメ, 内:ナメユビナメ	2.5YR7/3 灰	4mm以下の長- 石-雲多	古墳前期 羽状痕有		

4 古代の遺物

古代の遺物は、平安時代前期（9世紀）の遺物がまとまって出土した。主な遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、墨書き器、木簡である。文字資料については第V章で記述するため、ここでは土器類について3節同様出土地点ごとに概要を記す。詳細は、観察表を参照願いたい。

器種分類

分類は、山三賀Ⅱ遺跡（坂井1989）の分類に従ったが、甕類は破片資料のため除いた。また、土師器・黒色土器碗は、器高／口径×100<30以下の浅身をA類、35前後の深身をB類とした。A類は内湾または外傾し、B類は内湾または外反する器形が多い。なお、土師器碗A類は、ヘラミガキ調整の有無でA1類（無調整碗）とA2類（精製碗）に細分した。佐渡小泊窯産須恵器については、新たに細分した分類を使用した（V章参照）。

遺物各説（第12・13図、表3）

A水路 5区は、包含層から在地産須恵器杯蓋（86）・折縁杯（87）・杯（92）、小泊窯産須恵器杯（90・91）、黒色土器碗A類（99）、土師器甕（103）が出土した。在地産須恵器は貝屋窯（川上1982）～高山寺窯（小林2004）、黒色土器碗は坂ノ沢C遺跡（渡邊・田中2001）2号竪穴資料におおむね対比できる。90は、底径指數（底径／口径×100）69、器高指數26とやや底部径が大きく扁平な器形であり、カメ畠3号窯・大木戸窯資料（坂井・春日ほか1991）に対比できよう。6区は、包含層から土師器碗A類（93～97）、黒色土器碗（100）、土師器甕（101・102・104）、小泊窯産須恵器杯（88・89）が出土した。土師器碗はA類のみであり、坂ノ沢C遺跡2号竪穴資料に対比できる。88・89は、底径指數72～73、器高指數26～27と90と近似した数値を示す。下口沢窯資料ほど鋭角に腰が張らず器高指數がやや高いことからカメ畠3号・大木戸窯に対比するのが妥当であろう。101・102は、口縁端部が内折する点で共通する。ほかに4区から精製碗である土師器碗A2類（98）が出土している。

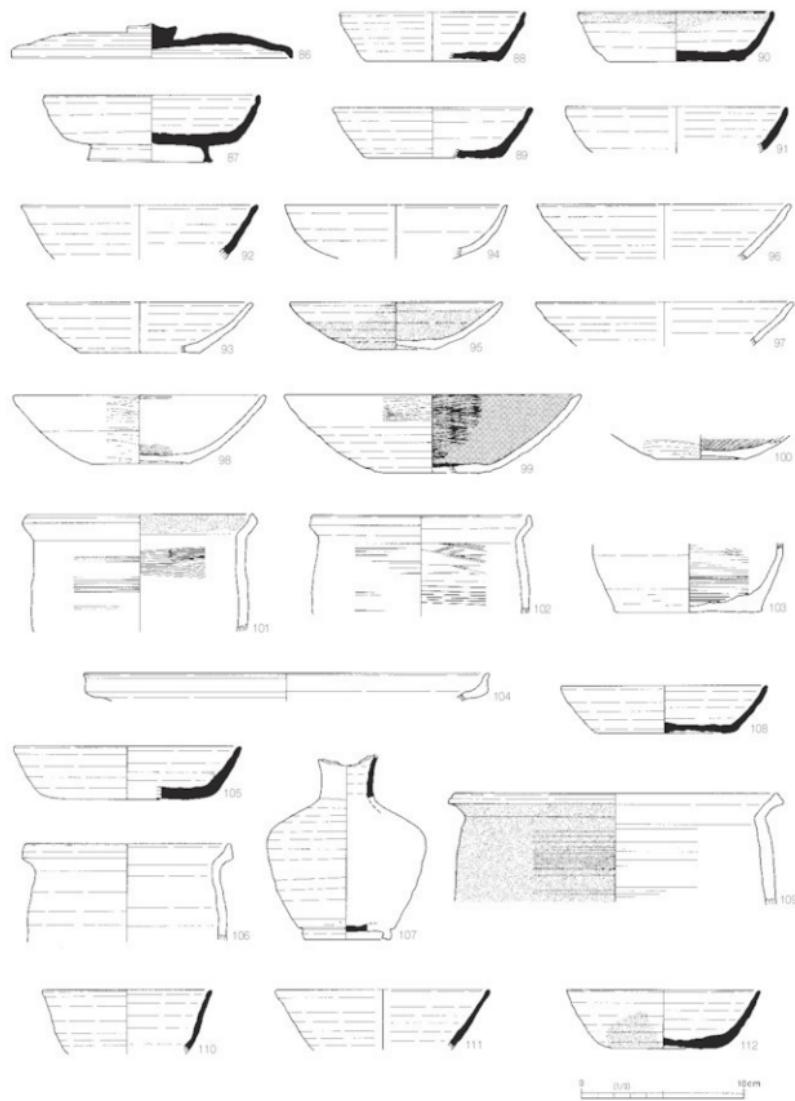
C水路 9区で口縁部を打ち欠いて使用した小泊窯産の小型長頸瓶（107）が出土した。9世紀前半に位置付けられる。13区仮設水路からは、在地産須恵器杯（105）と土師器甕（106）が出土した。A水路遺物と同時期であろう。

D水路 小泊窯産須恵器杯（108）、土師器甕（109）がある。108は、底径指數63・器高指數23で88～89に比べ浅身で底径が小さく器壁が薄いなど新しい特徴を有する。おおむねカメ畠1号窯（坂井・春日ほか1991）に対比でき、カメ畠2・3号窯に後出する時期に位置付けられよう。

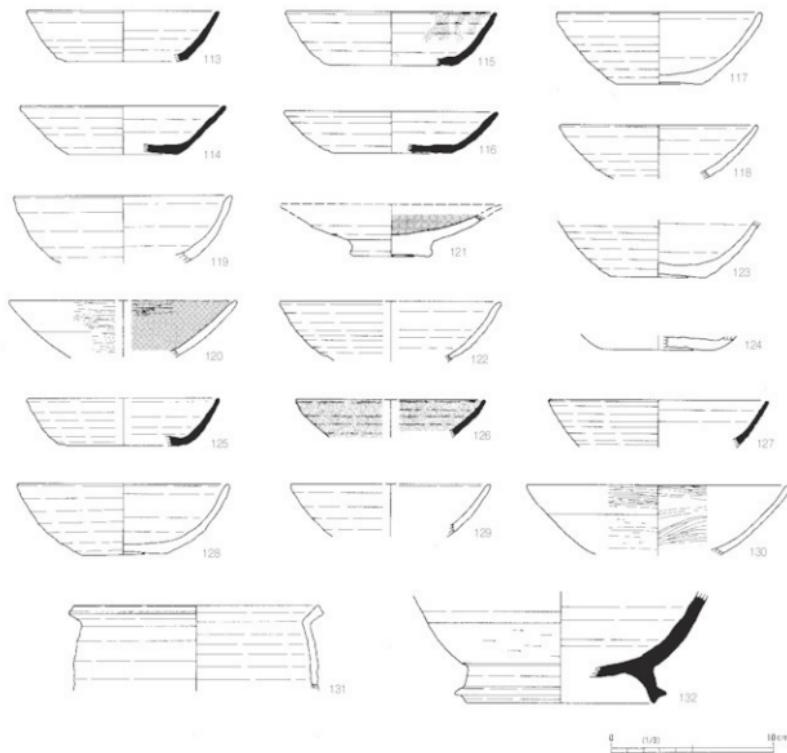
F水路 16～17地点で木簡とともに土器が集中して出土した。両地点の間は4m程度しか離れておらず、いずれも砂とシルト・粘土が交互に堆積することから流路跡が存在したと推測でき、本資料群は流路に廃棄した遺物と捉えられる。器種は多様で、在地産須恵器有台杯（110）・杯（112）、土師器碗A1類（118・129）、碗A2類（130）、碗B類（117・119）、黒色土器碗A類（120）・皿（121）、土師器甕（131）、小泊窯産須恵器杯（113～115・125～127）・短頸甕（132）がある。110・112は、口径が小さく碗器形に近いことから馬上3号窯資料（戸根1986）に対比できる。土師器碗は、A・B類とともに口径12cm前後のものが多い。121は、底部が柱状高台皿に類似するベタ高台の黒色土器皿で、下越地方に多く分布する。施釉陶器模倣器種であろう。小泊窯産須恵器は、いずれも口径12cm前後で器壁が薄く、底径指數が50～60台前半・器高指數が23前後と浅身で口縁部が開く器形である。小泊窯産須恵器では新しい時期に位置付けられ、江ノ下窯（坂井・春日ほか1991）資料に対比可能である。16・17地点以外から出土した遺物も同時期として問題ない。

小結

古代の土器も古墳時代の土器と同様に地点ごとに時期的なまとまりが見られ、A水路4～5区に9世紀代前半の遺物が多く、F水路16～17地点周辺に9世紀後半の遺物がまとまるという傾向が認められる。



第12図 古代の遺物(1)



第13図 古代の遺物(2)

表3 遺物観察表(2) 古代

船底上の略称: 長 = 長石, 石 = 石英, 花 = 花崗岩, 白 = 白色粒, 青 = 青色粒, 赤 = 赤色粒, 黄 = 黄色粒, 骨 = 海綿骨片

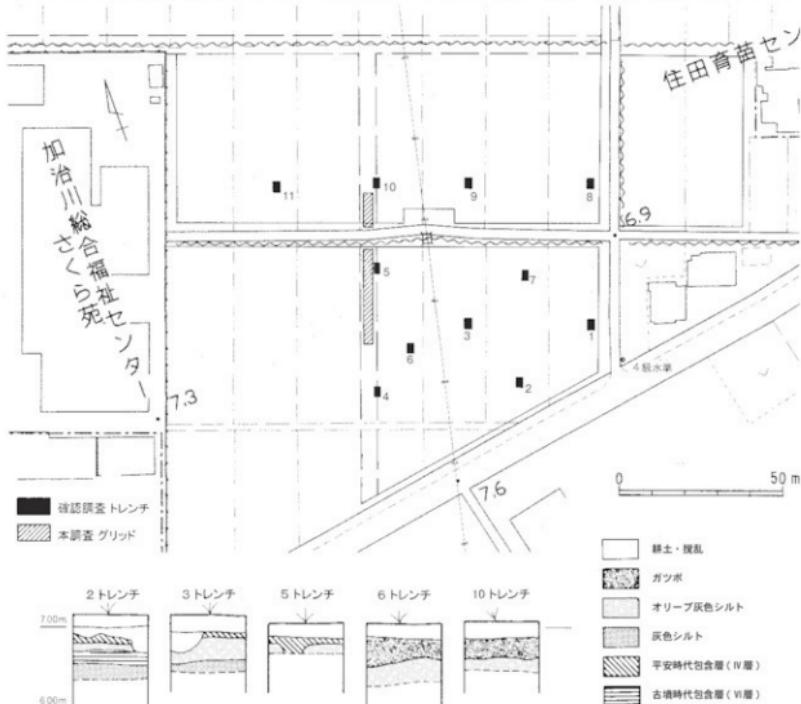
No.	遺構	グリット/トレンチ	網底	種別	器種	計測値(cm)			成形・調整	堆積	船上	時期	備考	所蔵	
						UH	器高	底径							
86	A水路5区	IV	須恵器	杯蓋	17.0	2.1	3.1	1/3	ロクロ左, ヘラキリ	A	N5/0灰	阿賀北2mm以下 の長石多	田原~ 高山寺	使用痕不明瞭	9
87	A水路5区	IV	須恵器	折縁杯	13.0	4.1	7.3	4/5	ロクロ右, ヘラキリ	C	SBS/1 青灰	阿賀北4mm以下 の長石多	田原~ 高山寺	外周被熱, 高台内側須 器の長石多	—
88	A水路6区	IV	須恵器	無台杯A1	11.2	3.0	8.2	1/8	ヘラキリ	C	SBS/1 青灰	小約1.1mm以下 の白多	3段階	口縁・内面・被擦れ	—
89	A水路6区	諸	須恵器	無台杯A2	12.0	3.1	8.6	1/3	ヘラキリ	C	SBS/1 青灰	小約1.1mm以下 の白骨	3段階	口縁・内面・被擦れ	12
90	A水路5区	IV	須恵器	無台杯A1	11.8	3.1	8.1	1/3	ロクロ左, ヘラキリ	C	10G6/1 黄灰	小約1.1mm以下 の白骨	3段階?	口縁外面タール付着, L1 縁・内面・被擦れ	9
91	A水路5区	IV	須恵器	無台杯A	13.4	2.8	—	1/8	ヘラキリ	C	SBS/1 青灰	小約2mm以下 の白多	3段階?	口縫れ	—
92	A水路5区	IV	須恵器	無台杯	14.2	3.3	—	1/8	ヘラキリ	C	2.5V6/1 黄灰	阿賀北1mm以 下の長石多	—	口縫外表面タールor膜, 口縫擦れ	—
93	A水路6区	諸	土縛器	無台杯A1	13.6	3.1	7.2	1/12	素切り	—	10YR8/3 浅黄	3mm以下の長 石・黄多	坂C 25	—	—

No.	造構	グリッド/トレンチ	層位	種別	器 様	計測値 (cm)			成 形・調整	堆積	色 調	船 上	時 期	備 考	排 国	写 真 国版
						13H 器高 (基底) (傾斜)	直高 (傾斜)	直有底 (傾斜)								
94	A木路 6区	鉢	上罐器	無台楕A	13.6	3.3	—	1/12	未切り	7.5YR5/4 に近い黄 粒	1m以下の砂	既C 2型				
95	A木路 6区	IV	上罐器	無台楕AI	12.8	2.9	4.6	1/3	未切り	2.5YR7/2 灰黄	2m以上下の長 石	既C 2型	内面保付着(明暗軸 傾斜)			
96	A木路 6区	IV	上罐器	無台楕AI	15.4	3.4	—	1/12	未切り	C7 10YR8/3 浅灰粒	3m以上下の長 石	既C 2型				
97	A木路 6区	IV	上罐器	無台楕AI	15.6	2.7	—	1/12	未切り	10YR7/4 に近い黄 粒	精良, 粒粉わず か	既C 2型				
98	A木路 4区	IV	上罐器	無台楕A2	15.2	4.2	6.0	1/3	成一體ハラケズリ→ コロヘラミガキ	10YR6/4 に近い黄 粒	精良, 粒粉わず か	既C 2型	精製機		9	
99	A木路 5区	IV	黑色土器	無台楕A	18.0	4.8	5.6	1/6	コロヘラミガキ, 未 切り	2.5Y6/4 に近い黄 粒	2m以上下の長 石	既C 2型	内面黑色処理			
100	A木路 6区	IV	黑色土器	無台楕A	—	1.5	5.4	1/3	成一體クロケズリ→ コロヘラミガキ	2.5Y5/4 黄	精良, 粒粉わず か	既C 2型	内面黑色処理			
101	A木路 6区	鉢	上罐器	度	13.2	6.0	—	1/6	カキメ・ハケメナデ	2.5Y7/3 浅黄	2m以上下の長 石	既C 2型	U罐部炭化物なし 外: 壁角			
102	A木路 6区	IV	上罐器	度	13.8	7.2	—	1/4	カキメ	2.5Y6/2 灰黄	1m以上下の長 石	既C 2型	U罐部炭化物付着 外: 壁角, 内: ヨゴレ			
103	A木路 5区	上罐器	度	—	4.2	8.6	1/3	未切り, 滴ロクロ スリ, JFG カキメ	10YR6/3/4K 灰粒	3m以上下の長 石	既C 2型	外: 壁 内: ヨゴレ		12		
104	A木路 6区	鉢	上罐器	度	24.6	1.7	—	1/12		7.5YR8/2 灰白	2m以上下の長 石	既C 2型				
105	C木路 13区板	IV	須恵器	無台杯	13.8	3.3	9.2	1/4	ヘラキリ	C 5BG6/1 青灰	阿賀北4mm以 上の長・G多	既C 2型	U罐・被覆, 相妙で土 壁底の船上に近い		9	
106	C木路 13区板	IV	上罐器	度	12.4	6.0	—	1/4		7.5YR6/4 に近い黄 粒	3m以上下の長 石	既C 2型	U罐部炭化物外: 壁 内: ヨゴレ			
107	C木路 9区	鉢	須恵器	長頭瓶	—	11.3	5.2	1/3	ヘラキリ左	5BG6/1 青灰	小約1mm以下 の白多	既C 2型	頭部上端剥り離え, 高 台埋れ			
108	D木路 3区	IV	須恵器	無台杯A2	12.6	2.9	8.0	1/2	ヘラキリ左	C 5BG6/1 青灰	小約1mm以下 の白多	既C 2型	U罐・内面・被覆		9-10	
109	D木路 3区	IV	上罐器	度	19.6	6.7	—	1/3	カキメ	10YR7/3 に近い黄 粒	2m以上下の長 石	既C 2型	外: 壁角, 内: ヨゴレ		9	
110	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	有台杯C	10.2	3.9	—	1/6		C 5BG6/1 青灰	阿賀北3mm以 上の長・G多	馬上	U罐埋れ			
111	F木路	IV	須恵器	有台杯 C?	13.0	3.7	—	1/10		C7 7.5Y7/1 灰白	阿賀北, 粗目1.1 mm以下の長 石	馬上	U罐埋れ			
112	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	無台杯	11.8	3.6	6.4	1/4	ヘラキリ右	C 10C6B6/1 青灰	阿賀北, 粗目1.1 mm以下の長 石	馬上	U罐・内面・被覆		10	
113	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	無台杯A3	11.6	3.1	7.2	1/4	ヘラキリ	C 5BG6/1 青灰	小約1mm以下 の白多	既C 2型	被覆			
114	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	無台杯A3	12.4	3.0	6.6	1/5	ヘラキリ	C 5BS5/1 青灰	小約2mm以下 の白多	既C 2型	U罐・内面・被覆			
115	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	無台杯A2	12.8	3.3	7.4	1/4	ヘラキリ	C 2.5Y7/2 灰黄	小約1mm以下 の白多	既C 2型	他: 壁底剥離・U罐・内面・被 覆, 内面タール付着 (不明瞭?)			
116	F木路	IV	須恵器	無台杯A3	13.0	2.5	7.2	1/5	ヘラキリ	C 7Y6/1 灰	小約1mm以下 の白多	既C 2型	他: 壁底剥離・U罐・内面・被 覆, 黒苔痕			
117	流路 F木路 16~17地	IV	上罐器	無台楕B	12.4	4.4	5.2	1/3	未切り	10YR6/4 に近い黄 粒	秒砂わずか	既C 13上			10	
118	流路 F木路 16~17地	IV	上罐器	無台楕A1	12.0	3.3	—	1/6		10YR6/3 に近い黄 粒	秒砂わずか	既C 13上				
119	流路 F木路 16~17地	IV	上罐器	無台楕B	13.2	4.1	—	1/6	成形粗雑	10YR7/2 に近い黄 粒	3m以上下の長 石	既C 13上, 精製機U罐埋 れ				
120	流路 F木路 16~17地	IV	黑色土器	無台楕A	13.8	3.5	—	1/12	クロケズリ→コロ ヘラミガキ	10YR6/3 に近い黄 粒	秒砂わずか	既C 13上	内面黑色処理, U罐埋 れ			
121	流路 F木路 16~17地	IV	黑色土器	高台瓶	—	2.4	4.6	1/3	内面ハラミガキ, 未 切り後クロケズリ	10YR6/4 に近い黄 粒	2m以上下の長 石	既C 13上	内面黑色処理, 高台柱 状			
122	F木路	IV	上罐器	無台楕B	13.4	3.7	—	1/8	成形粗雑	7.5YR7/3 に近い黄 粒	2m以上下の長 石	既C 13上, 精製機U罐埋 れ				
123	F木路	IV	上罐器	無台楕B	—	3.4	5.6	1/3	未切り	2.5Y6/3 に近い黄 粒	秒砂わずか	既C 13上, 精製機U罐埋 れ				
124	F木路	IV	上罐器?	無台杯	—	0.9	6.8	1/3	ヘラキリ	10YR6/2 灰	3m以上下の長 石	既C 13上, 精製機U罐埋 れ				
125	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	無台杯A2	11.6	2.9	6.8	1/12	ヘラキリ	C 3BS5/1 青灰	小約1mm以下 の白多	既C 13上, 精製機U罐埋 れ				
126	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	無台杯A1	11.4	2.3	—	1/12		C 3BG6/1 青灰	小約1mm以下 の白多	既C 13上, 精製機U罐埋 れ				
127	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	無台杯A3	13.4	2.9	—	1/6		C 7.5Y6/1 灰	小約1mm以下 の白多	既C 13上, 精製機U罐埋 れ				
128	F木路	IV	上罐器	無台楕B	12.8	4.4	5.0	3/4	未切り	10YR6/4 に近い黄 粒	秒砂わずか	既C 13上	使用根脚明瞭, U罐・内 面・被覆		9	
129	流路 F木路 16~17地	IV	上罐器	無台楕A?	12.0	3.2	—	1/8	クロコ成形	10YR7/4 に近い黄 粒	秒砂わずか	既C 13上				
130	流路 F木路 16~17地	IV	上罐器	無台楕A2	16.0	4.3	—	1/6	外: クロコケズリ→ コロヘラミガキ, 内: カキメ	10YR6/4 に近い黄 粒	秒砂わずか, 背 ?	既C 2型	精製機			
131	流路 F木路 16~17地	IV	上罐器	度	14.8	5.2	—	1/6	クロコ成形	10YR7/3 に近い黄 粒	2m以上下の長 石	既C 2型	U罐部炭化物頬, 外: 壁角, 内: ヨゴレ			
132	流路 F木路 16~17地	IV	須恵器	短頭瓶	—	6.6	11.4	1/3	体底部下口クロケズ リ?	N7/0 灰白	小約2mm以下 の白多, 分	既C 13上	高台埋れ			

第IV章 県道北側の調査

1 確認調査の経過と遺跡の範囲

平成20年10月に、県道北側で遺跡範囲確認調査を実施した(第II章1参照)。調査は、1.2m幅の法面バケット装着0.25m級バックホーを使用して、長さ3mのトレンチを掘削した。トレンチ設定の間隔は約30mであり、遺物包含層(以下、包含層)と遺構の遺存状況を反映させつつ適宜中间にも設定した。ただし、南北に通る高圧送電線は小規模で電線が低いため、直下から10m以内は避けた。基本層序は、耕土、黒褐色粘質土またはガツボ(未分解腐植土)層、灰オーリーブ色粘性シルトの古代包含層、オリーブ灰色粘土の古墳時代包含層、地山の灰色シルト・粘土層の順である。包含層の土色はオリーブがかり、炭化物を多く含む。11箇所のトレンチの内、古代の包含層を検出したのは2・3・5トレンチ(以下、T)、下層に古墳時代の包含層があるのは2Tのみである。なお、8~11Tの北方は水田がぬかるんで重機が入れず、人も稲株の上しか歩けない状態であった。対象の水田で検土杖による深さ1mまでの探査を行ったが、全面ガツボ層が広がっており包含層を推測できる微高地は確認できなかった。よって遺跡の範囲は、2・3・5Tあたりで1・7・10・11・6Tに囲まれた帶状の部分と想定できた。



第14図 県道北側のトレンチ位置と土層

2 本調査の経過

本発掘調査は、平成21年8月20～31日に実施した(第Ⅱ章1参照)。古代の包含層がある確認調査5Tに近接するものの、北側の10Tと南側の4・6Tは深いガツボ層となっていたことから、調査区はそれらの内側に設定した。幅2.8m、延長46.0mの南北に細長い調査区であり、その北寄りを横切る農道と用排水路を境に、調査区南半・北半と呼称する(第15図)。施工業者に打設してもらった基準杭を基点として、調査区を2mの方眼で区切り、東西方向は西側1.0mをD列、東側1.8mをE列とした。南北方向のグリッドは北から算用数字を振り、北端は「13D・E」、南端を「35D・E」と呼称した。

表土掘削では、26～30グリッドで東から西側へと張り出す舌状の灰色シルトの微高地を確認したが、その南北両側はともに地表下65cmまでガツボ層で、遺構は存在しない。北半の13～17グリッドは、耕土20cmの直下が灰色シルトの地山層であり、17Eではガツボの落ち込みが始まるとため、18～20グリッドにある農道と水路は調査掘削を不要と判断した。

土層を第16図に示した。包含層は確認できず、遺構以外からの遺物出土は、II層擾乱、微高地北側斜面のガツボ層下部(IV層)、同南側緩斜面のV層である。V層は、土質化した未分解腐植土(ガツボ)と地山の灰色シルト層がマーブル状に混合した層である。なお表4の遺物出土層位のうち、本調査グリッドのみが第16図に対応する。

3 遺構

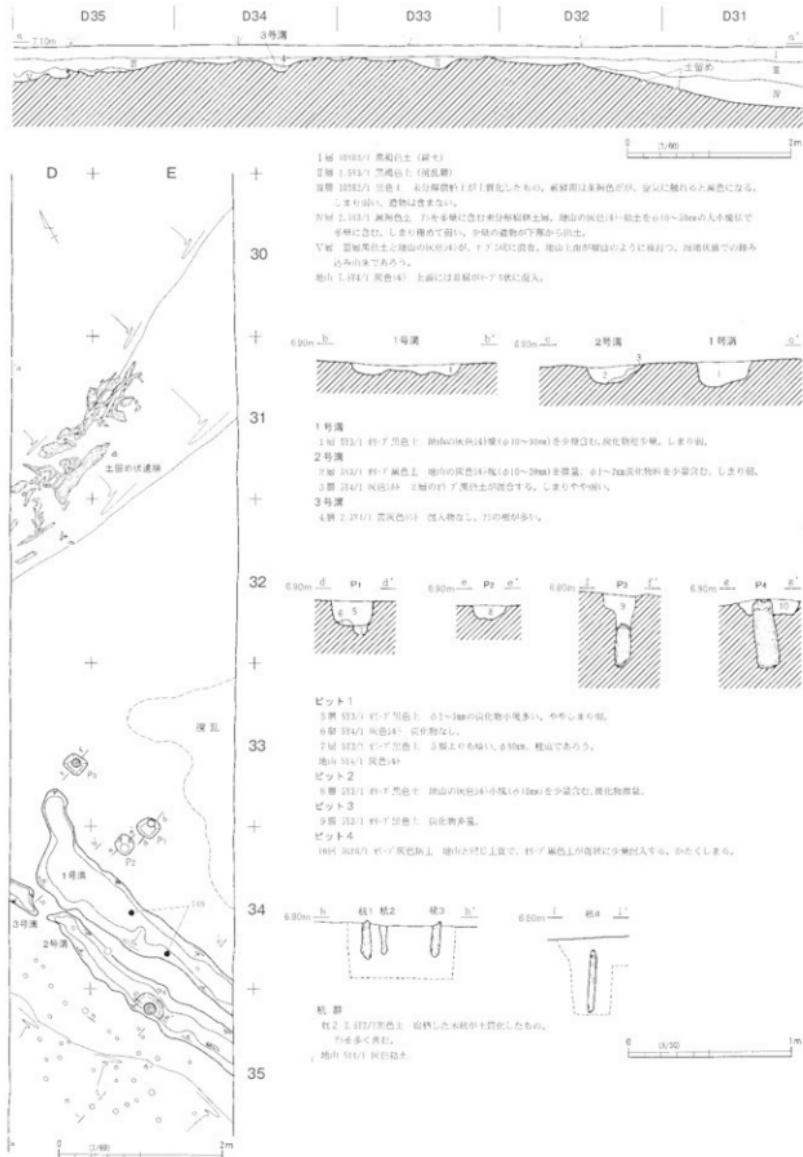
南半の調査区(第16図)では、ガツボ層の低地に舌状の微高地が東から西方向へ張り出している。遺構検出面は耕土直下で擾乱が著しく、遺構上部もかなり削平を受けていると推察できる。微高地の南辺には溝・ピット・杭群があり、北辺の斜面中位には幹や枝が並べられ、土留めや足場状の景観をなしている。調査区北半では、南東隅に調査区南半から続くガツボ層の低地が残り(第15図)、この北側の微高地には畝状小溝と称される浅い溝群が存在する。調査区北端から北東1.5mには確認調査10Tがあり、微高地はここまで広がらない。

溝1～3号の3条の溝を検出したが、2・3号溝は本来同一で、上部の削平によって分断されたと見える。それらが西側の傾斜に沿う形ではば並走している。P1・P3が同じ建物の一部とすると、雨落ち溝の可能性も考えられる。1号溝は、幅が一定せず底面も凹凸が著しい。「月」墨書の須恵器杯(149)が2箇所に分かれて出土した。また2号溝の底面からは、P4の柱根が切断されたような状態で出土した。

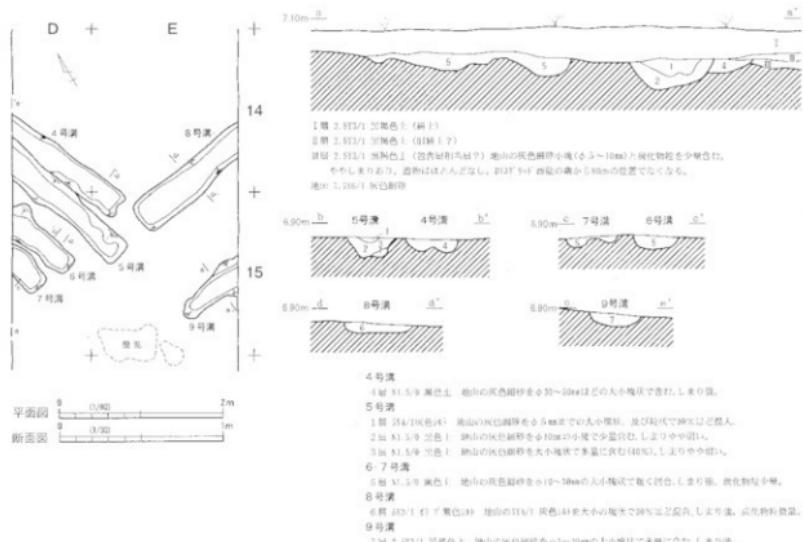
ピット 挖立柱建物の柱穴と推定できる闊丸方形のピットを4基検出した。深さ9～13cmと浅いため、上部は水田耕作によって削平を受けていると考えられ、本来建物として組み合わせる柱穴も確認できなかった確率が高い。P3・P4では木柱の根入れ部分、というよりも地山の粘土へ沈みこんだ先端が残存していた。柱穴底面から木柱下端(接地部)まで、P3が35cm、P4が32cmである。P3木柱の接地部は楔状に尖り、P4は平坦に加工されている。樹種は、スルデとクリである(詳細は第VI章)。P1の7層も柱根が沈降し腐った部分であろう。P4の柱穴は、地山の灰色粘土(5Y4/1)に黒褐色土が少量シミ状に混入した状態で、2号溝下面で検出した。西側のプランは把握できなかった。調査中の観察から、P4のほうが古い。



第15図
遺構全体図



第16図 南半の過構



第 17 図 北半の遺構

杭群 2号溝西方の緩斜面に、直径2~7cmほどの腐った植物や黒褐色土の円形プランを多数確認した。当初は岸辺に生えた植物と考えたが、北側斜面には全く存在しないため、念のためにh-h'のラインで掘削し断面を観察した(第16図、図版5・11)。その結果、杭1・3は先端を斜めに断ち切る加工があった。側面は腐食が著しく原形をとどめない。杭4も同様と想定したが、本質部はすべて土壌化し、黒色土となっていた。他の円形プランも幾つか断ち割ったところ、アシの腐食したものやシミ状で杭と考え難いものがある一方、杭4のように検出面では何ら痕跡がないながら、粘土中に杭が残っていた例もある。このような遺存状態のため、調査区内を全面スライスすることはせず、直径3~6cmくらいの打ち込みの杭がランダムに配されているとの認識にとした。機能的には、護岸の一種であろうか。

土留め状遺構 北側の斜面では、幹や枝が斜面と直交する方向を意識するように並べられていた。自然木が倒れたものではない。スponジ状にブヨブヨで取り上げることが難しく樹種同定は行わなかったが、広葉樹である。土留めや水際での足場のような用途であろう。

畝状小溝 調査区北半の微高地には、浅い畝状の小溝群のみが存在する(第17図)。遺跡の周縁部に配される遺構であり、本遺跡でも最北端となる。確認調査10Tの位置と周辺の検土杖探査を勘案すると、南北10mほどの小規模な微高地と推察できる。溝は8条で、底面は不整な凹凸がみられるものの、8号溝のみ平坦であった。4~7号と8・9号が直交する位置関係にあり、埋まっている4号を5号が切っている。これらから、4・6号、5・7号、8・9号という2条セットの関係を見出せるが、8・9号は他のどのセットでも共存が可能である。

4 古墳時代と古代の遺物

県道北側調査区の遺物出土量は、確認・本調査合わせても平箱5箱である。これは、調査地点が遺跡の縁辺部にあたるためであろう。出土遺物は、県道南側の調査同様、古墳時代前期と平安時代前期のものであるが、古墳時代の遺物は土師器の破片が数点出土したのみである。平安時代の遺物は、土師器、須恵器、墨書き器があるが、大半が破片資料で杯類以外全体の器形が復元できたものはない。器種分類は、前章の分類と同様である。以下、確認調査・本調査の順に概要を記す。詳細は、観察表を参照願いたい。なお観察表では、本調査グリッドの層位は第6図の土層図に対応し、確認調査トレンチの層位は第5図の土層に準じている。

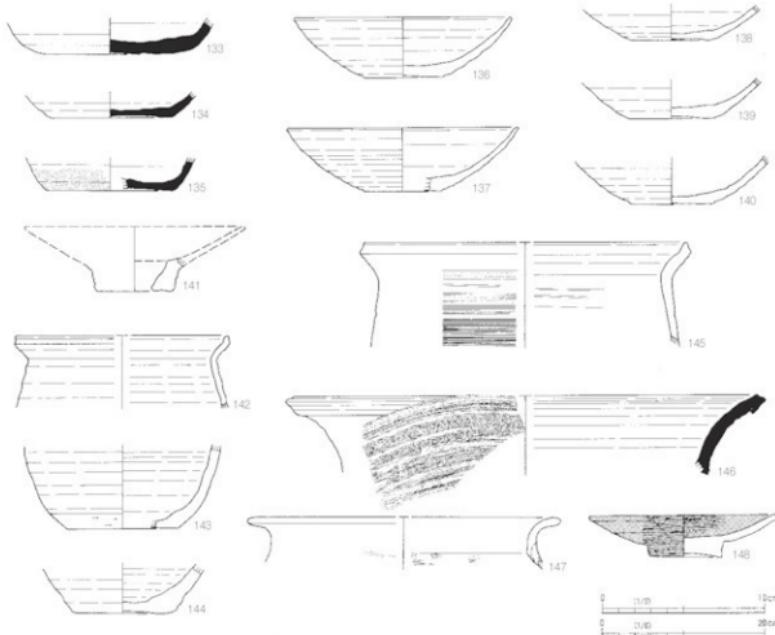
確認調査(第18図、表4)

古墳時代の遺物 147のみ図化できた。土師器壺B2類に分類され、口縁部は丁寧なヨコナデ調整、胴部は内外面ともハケメ調整で仕上げている。

古代の遺物 トレンチごとの出土傾向に違いがないため、種別ごとに一括して記述する。

須恵器 小泊窯産須恵器杯(134・135)がある。破片であり詳細は不明であるが、134はカメ畠1号窯～フスベ1号窯資料(川村2002)、135はカメ畠3号窯・大木戸窯資料に対比可能と思われる。

土師器 楠(138)・皿(141)・壺(143)がある。138は、体部の外傾具合からA1類であろう。141は、いわゆる柱状高台皿に類似するが、第13図121同様下越地方に多い古代の皿とするのが妥当であろう。



第18図 県道北側調査の遺物

本調査（第18図、表4）

古代の遺物のみ出土した。グリッドごとにまとめて出土したものはないので、種別ごとに記述する。

須恵器 在地産須恵器杯(133)・甕(146)がある。133は、底部径の大きさや器壁の厚さから貝塚窯以前のものか。

146の甕は、3条の柳条状工具により、口縁部を2段の波状文で飾っている。

土師器 楠A 1類(136・137・139・140)、甕(142・144・145)がある。136・137は、口径13.2・14.0cm、底径指数36・33、器高指數はともに28で、浅身で底径が小さい。坂ノ沢C跡跡9号土坑または13号土坑資料に対比できる。9号溝出土139、5号溝出土140の土師器楕も136・137と同時期とみてよいだろう。甕142・145は、ともに口縁端部が内折する器形で、A水路6区出土の甕101・102と共通する。

黒色土器 148は、調査区周辺で表採されたものであるが、時期的に遺跡に関連する資料と評価できるため、ここに掲載した。内外面に入念なヘラミガキ調整をした優品で、121同様、施釉陶器模倣器種と思われる。

小結

北側調査区の資料は、出土量の点では南側調査区に劣るもの、時期差がなく墨書き器が含まれる点で、相互に補完関係にある資料と位置付けられる。南側調査区の資料との対比では、古墳時代の土器は一点のみであり保留するが、古代の資料は、133・135・142・145がA水路4～6区、134・136～140がF水路16・17地点の資料に対比できる。後者は、土師器楕類にB類を含まずやや古相を示すが、F水路16・17地点とほぼ同時期として問題はない。よって、北側調査区の遺跡の存続期間は、9世紀前半～後半となる。

なお、2号溝と5・9号戸状小溝から9世紀後半の遺物が出土しており、遺構密度の低さと重複関係を勘案すれば、今回検出された遺構の構築時期は、9世紀後半の短期とできよう。

表4 遺物観察表(3) 県道北側

中船の略称：長=長石、石=石英、花=花崗岩、白=白色砂、褐=褐色砂、赤=赤色砂、青=青母、骨=海綿骨針

No.	遺構	グリッド トレンチ	層位	種別	器種	計測値(cm)		遺存度 (目視)	成形・調整	垂れ毛	色調	船上	時期	備考	掉拂	写真 写真版	
						口径	底径										
133	E24	IV	須恵器	無柄杯	—	19	8.0	底部有	クロロ(右),ヘラキリ	N8/0 9/1	阿賀北3mm以下 底:白多量	目屋～ 高山寺			10		
134	10 T	II	須恵器	無柄杯	—	4.1	7.8	4/5	クロロ(左),ヘラキリ	C	10CB6/1 青灰	小孔1mm以下 底:白	6段階？ 鉄部削れ		—		
135	7 T	II	須恵器	無柄杯	—	2.0	7.6	1/2	ヘラキリ	C	5H7/1 明内	小孔1mm以下 底:白多	3段階 口縁・内面・底部削れ				
136	E29-30	V	上部部	無柄楕AI	13.2	3.7	4.8	2/3	クロロ成形,素切り		2.5YR7/6 粉	2mm以下:長 石・茎・多	段C 9 —13L	口縁・内面・底部削れ		9	
137	E30	V	上部部	無柄楕AI	14.0	3.9	4.6	1/4	クロロ成形,素切り		5YR6/6 粉	2mm以下:長 石・茎・多	段C 9 —13L	口縁・内面・底部削れ			
138	10 T	II	上部部	無柄楕AI	—	1.9	4.8	1/2	クロロ成形,素切り		10YR5/3 に:4H1黄褐	精良,砂粒わず か	段C 9 —13L	底部削れ			
139	9溝	E15	上部部	無柄楕AI	—	2.2	5.2	1/4	クロロ成形,素切り		10YR6/3 に:4H1黄褐	精良,砂粒わず か	段C 9 —13L	内面・底部削れ			
140	5溝	D15	上部部	無柄楕AI	—	2.6	5.2	1/3	クロロ成形,素切り		2.5Y6/3 に:4H1黄褐	精良,砂粒わず か	段C 9 —13L	内面・底部削れ		—	
141	3 T	I	上部部	高台皿	—	1.7	4.6	1/3	クロロ成形		7.5YR6/4 に:4H1相	1mm以下の長 石・相	高台柱状,底跡(ヘタ)			18	
142	E32	II	上部部	甕	—	12.8	4.9	—	クロロ成形		10YR7/3 に:4H1黄褐	1mm以下の長 石・茎・多	L脚部灰化物なし, 内:ヨゴレなし				
143	3 T	I	上部部	甕	—	5.1	6.8	1/4	クロロ成形,素切り→ 底部クロコケズリ(右)		2.5Y6/2 灰黄	3mm以下:長 石・茎・多	外:深・コゲ内:ヨゴレ				
144	E33	V	上部部	甕	—	2.7	6.0	底部有	クロロ成形,素切り		2.5Y6/2 灰黄	1mm以下:長 石・茎・多	外:深・コゲ内:ヨゴレ		10		
145	E30	V	上部部	甕	—	19.8	6.4	—	クロロ成形→キメ		10YR7/3 に:4H1黄褐	4mm以下:長 石・茎・多					
146	D29	V	須恵器	甕	55.8	9.2	—	1/12	頭部造文3条・頬2 段施入		N7/0 9/1	1mm以下:長 石・多			9		
147	2 T	VI	上部部	甕	—	19.0	2.2	—	1/1 (1)リコナデ,外:ナメ ハラミ:ジコハマ リコロ成形→腰ロ コラミ→ロコロミ キ,口縁ココヘミガキ		10YR7/3 に:4H1黄褐	2mm以下:長 石・茎・多	古墳前期 外:深				
148	表様	黑色土器	高台皿	11.4	2.6	4.2	2/3			3H6	精良,砂粒わず か,骨	精良,内外面黑色地 理,高台柱状			9		

第V章 墨書文字資料

1 墨書土器と木簡

七社遺跡の文字資料は、墨書土器と木簡がある。F水路16地点出土の木簡は、九丸を習書した「九丸木簡」で、県内では草野遺跡（水澤2009）、大沢谷内遺跡（新潟市埋蔵文化財センター2008）について3例目の出土となる。なお本資料は、平安時代の九丸木簡としては、県内初出である。

墨書土器（第19図、表5）

器種と時期 149・151は、小泊窯産須恵器杯で江ノ下窯資料（坂井・春日ほか1991）に対比できる。須恵器杯150は、馬上3号窯～狼沢2号窯（中川・土井ほか1973）に、須恵器折縁有台碗152・153は狼沢2号窯に並行する時期に位置付けられる。土師器碗154・155は、坂ノ沢C遺跡10号土坑または13号土坑資料に対比できる。おむね150・152・153が9世紀前半～中葉、それ以外は9世紀後半に位置付けられよう。

墨書部位と文字種 155は体部に、それ以外は底部外面に墨書される。底部への墨書は、154を除き外周付近に書く例が目立つ。文字の種類は、「七」「月」「物」「貴」がある。「七」は複数使用され、字体は2種あるが筆順は共通する（浅井勝利氏教示）。県内の出土例は、「新潟県内出土古代文字資料集成」（小林・相沢2004）によれば、「七」が曾根遺跡など10数遺跡あり、県内北半での出土例が多い。「月」は鬼倉遺跡で3点、「物」は的場遺跡など4遺跡で出土している。「貴」は管見では本例のみである。

木簡（第19図、表6）

残存長16.7cm、残存幅4.9cm、厚さ0.3cmの曲げ物の底板を転用したもので、九丸の習書木簡である。習書後中央で2つに割り、左側の板の右上下端を削り取って廃棄していた。工事立会いであり出土位置の記録はないが、調査担当者によれば、一枚板の状態で習書面と151の底部が接して出土したとのことである。状況証拠でしかないが、2枚に割った板に細工をした後、元の姿に戻して習書面上に杯を置いて流路に廃棄した可能性がある。

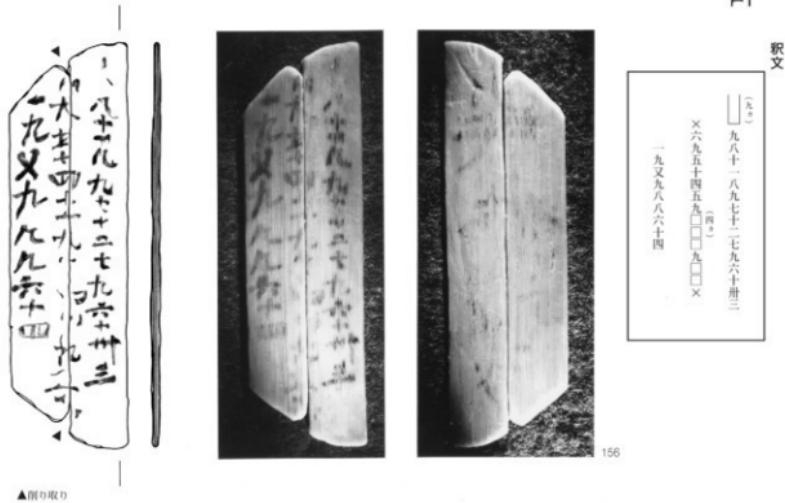
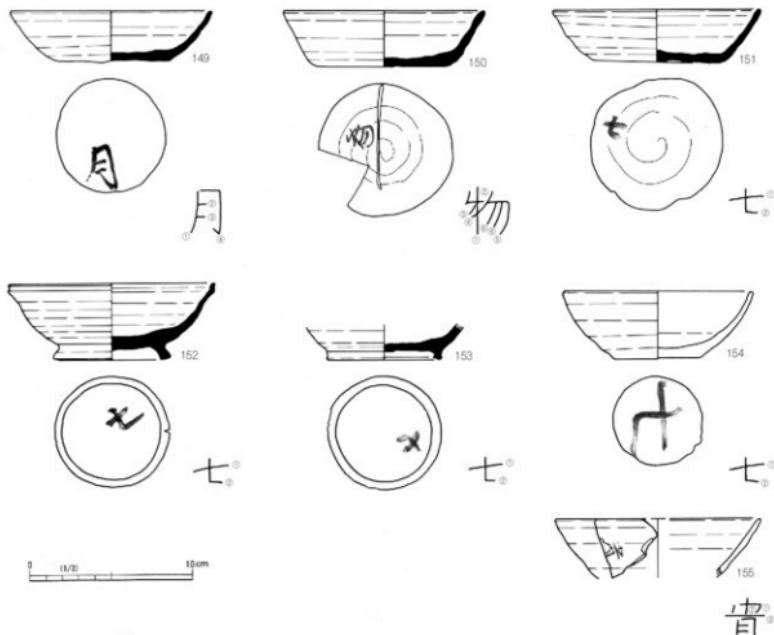
表5 遺物観察表(4) 墓書土器

※土器の略称：長=長石、石=石英、花=花崗岩、白=白色釉、黒=褐色釉、赤=赤色釉、灰=灰化釉、雲=雲母、骨=海綿骨針

No	造構	グリッド・トレンチ	層位	種別	器種	計測値(cm) 口径 高さ 幅 高さ 幅 高さ	邊存度	成形・調整	垂れき	色調	船上	時期	備考	図版	写真 図版
149	1溝	E29	4区	須恵器	無台杯A2	12.2 3.1 6.9	ほぼ完存 縦筋	クロコ(左) ヘラキリ	C	N8/0 R8/1	小泊,シルト質・精良 1mm以下の白・骨・灰	6段階新	底に「月」墨書		
150	D本路	タクラン	須恵器	無台杯	12.3 3.4 8.3	2/3	クロコ(右) ヘラキリ	C	2.5Y7/2	阿賀北,コンクリート 状3mm以下の長・石多	馬上	底に「物」墨書, ヘラ引き痕			
151	F水路	IV	須恵器	無台杯A2	12.6 3.3 7.4	3/4	クロコ(左) ヘラキリ	C	100B6/1 灰青	小泊,4mm以下の長多	6段階新	底に「月」墨書			
152	F水路	IV	須恵器	折縁碗	12.4 4.7 7.0	1/2	クロコ(右) ヘラキリ	C	100H5/1 灰青	阿賀北,コンクリート 状,4mm以下の長・石多	銀沢	底に「七」墨書, 高台付	19	10	
153	津	須恵器	折縁碗	—	2.0 7.6	底部存	クロコ(左) ヘラキリ	C	100H5/1 灰青	阿賀北,コンクリート 状,2mm以下の長・石多	銀沢	底に「七」墨書,打ち欠 きも見,高台削れ			
154	A本路 6区	IV	土師器	無台碗B	11.4 4.2 5.2	略定形	クロコ成形, 手切り		7.5YR6/3 にふい・間	積良,砂粒わずか	銀沢	底に「七」墨書,内 面帶状に剥れ			
155	10T	II	土師器	無台碗B	12.4 3.6 —	1/10	クロコ成形		10YH7/2 にふい・斑粗	積良,砂粒わずか,雲	銀沢	底に「貴」墨書			

表6 遺物観察表(5) 木製品・木簡

No	造構	グリッド・トレンチ	層位	種別	器種	計測値(cm) 長さ 幅 厚さ	邊存度	木取り	備考	図版	写真 図版
156	流路	F本路 16地点	IV	木製品	曲物底板 (木簡)	16.7 4.9 0.3	約1/4	板 目	九丸地に転用。習書後、板の真中に割り、左半分の板の右側上下を削り取って焼成。記録はないが調査者によると、出土状況から木板は2枚になった板をもとの状態にして、九丸習書面上にNo.151須恵器を正面において廻した可能性がある。表面も墨書きがあるが判読不可。	19	29日



▲削り取り

第19図 黒書土器と木簡

0 1/2 5 cm

2 七社遺跡出土「九九」木簡について

現状では等幅の2本の片になっているが、両片は接合し、切断部分に書かれている文字が両片にまたがることから、文字が書かれた後に切断されたものであることがわかる。裏面にも墨痕が認められるが、文字としては判読できない。

文字は稚拙で独特の癖のあるものであることや九九の誤りがある（1行目の「七九」を「六十冊」と誤って書き、その後に「三」と正しい値を記している）ことなどから、本木簡は初学者が九九を練習する際に記したものと思われる。

九九がいつどこで発生したかはわかっていない。中国では、古く漢代の遺跡である湖南張家界古入堤遺址出土の竹简に九九が記載され、4世紀頃の成立とされる『孫子算經』、また敦煌出土木簡などにも九九が記されたものがあるなど、古くから用いられたことがわかっている。日本への伝来の時期は不明であるが、官人の素養として文筆とともに算術が求められ、あるいは学舎において算学生の学ぶべき経書が列挙されており、九九のような基礎的な知識はこのような高度な算術を学ぶ前提として当然のことながら教授されていたものと思われることなどから、律令体制が確立されるまでには日本に伝来していたものと考えられるであろう。長野県更埴市屋代遺跡群、平城宮跡などからは8世紀の九九木簡が出土していることがこのことを裏付ける。平安時代の貴族の教養書である『口遊』（天福元年・970年成立）に、九九の唱え方が記載されていて、この時期までには広く知られるものとなっていた。

本木簡と他資料の記載を比較してみると、九九から始まり八九、七九…の順に進むことは共通する。しかしながら、一九の部分が、「孫子算經」、及び屋代木簡、平城宮木簡では「一九如九」、『口遊』では「一九」とあるのにたいし、本木簡では「一九又九」と独特の表記になっていることが注目される。「又」は正倉院文書などでも同じものを繰り返すときに「同じく」という意味で使われることもあり、「一九」の結果が同じく「九」になるという意味で考えれば違和感はない。「又」表記の典謨は不明であるが、古代の日本において、必ずしも全国一律の算術教育が施されていたわけではないことを示す貴重な実例といえるのではないだろうか。

なお、新潟県内では大沢谷地遺跡（新潟市）からも九九木簡が出土しているが、ここでも「如」の文字は使われていない。

土器に文字を書く（墨書土器）行為以上に実務官僚的色彩の強い計算能力（九九）を必要とする階層、もしくはその予備軍にあたる層がいたということは、近隣にこれらの階層を受容する組織があったことを匂わせるものである。すなわち、九九を用いて仕事をする必要のある（下級）官人が勤務する場としての官衙などの存在を想定することができるであろう。ただし、本木簡のほかには直接官衙を示す資料に乏しく、構造も官衙的な要素を見出すまでには至っていないことなどから本遺跡を官衙そのものと位置付けることは現時点では難しいと考える。

本木簡の解説にあたり、相沢 央氏（新潟市歴史文化課）のご協力を得到了。

（浅井勝利）

＜参考文献＞

大矢真一「和算以前」（中央公論社、1980年）

任 雜愈 ほか編『中国科学技術典籍通鑑』数学卷1 鄭州,pp.401-420（河南教育出版社、1993年）

平川 南 ほか編『長野県屋代遺跡群出土木簡』（長野県埋蔵文化財センター、1996年）

湖南省文物考古研究所・中國文物研究所「湖南張家界古入堤遺址與出土簡牘概述」（『中國歷史文物』二〇〇三年第二期）

新潟市埋蔵文化財センター「大沢谷地遺跡現地説明会資料」（新潟市、2008年）

東北大學和算資料データベース <http://dbr.library.tohoku.ac.jp/>

第VI章 自然科学分析

1 新発田市七社遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、七社遺跡より出土した掘立柱建物の柱材2点と、杭材2点の計4点の木材である。時期は古代である。

(3) 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真1・2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 写真3

横断面：年輪のはじめにやや小型から中型の道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が多数集合して、接線方向あるいは斜線方向に配列する。早材から晩材にむけて道管の径は徐々に減少していく。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は異性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりヌルデに同定される。ヌルデは、北海道(渡島半島)、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmであるが、大きいものは高さ13m、径45cmに達する。耐朽性、保存性はさほど高くない材で、器具、ろくろ細工、薪炭に用いられる。

(5) 所見

七社遺跡出土の木材のうち、柱材2点はクリとヌルデ、杭材2点はいずれもクリであった。クリは温帯に広く分布する落葉高木であり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。やや乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。木材は重硬で保存性が良い材である。ヌルデは温帯を中心に広く分布する落葉高

木であり、複雑地などの先駆的な二次林種である。概して強さ中庸の材である。以上、クリもヌルデも典型的な二次林種である。当時遺跡周辺に生育していたか、近隣地域よりもたらされたと推定される。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296.
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242.

表1 七社遺跡における樹種同定結果

試料			結果 (学名／和名)	
Pit 3	柱材	写真3	<i>Rhus javanica</i> L.	ヌルデ
Pit 4	柱材	写真1	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
杭 1	杭材		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
杭 4	杭材	写真2	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ

2 樹種同定資料について

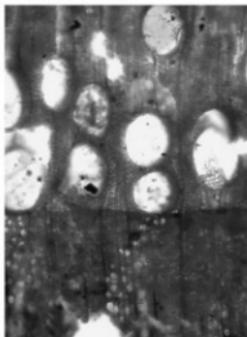
柱や杭として出土した木材のうち、切断痕・加工痕の残るもの図版11に写真で示した。ピット3・4の柱材は、柱根の根入れ部分と地山に沈みこんだ部分が腐らずに残ったものである。いずれも芯持ち丸木材で、柱根下端部の形態は、ピット3の材が二方向から楔状に鉈入れされ、ピット4の材は接地面が平坦に削られている。伐採時の痕跡ではなく、加工痕であろう。杭材の樹種同定は、杭1・4で実施した。杭1は、先端部の横断面が三角形で、尖らすために二方向から削られた面を残すが、周囲の腐食が著しく、素材や加工痕がはつきりしない。杭4は細い丸木材で、片方向からのみ断ち切るように削られている。

本製品や柱材の観察・記述の視点について、加藤 学・猪狩俊哉の両氏がまとめている（加藤ほか2004）。春日真実氏は、新潟県内の古墳時代から中世の柱根の樹種を集成し、柱材樹種の時期的・地域的な選択傾向、さらには建物種別との相関関係を求めており（春日2008）。本遺跡出土の柱材は、クリ・ヌルデと同定された。堅く丈夫なクリは、各時代を通して最も多く用いられ、特に平安時代以降の掘立柱建物には多用されている。ヌルデは、胎内市蔵ノ坪遺跡・反貫目遺跡でのみ確認されており、両遺跡とも時期的・地域的に本遺跡と近い関係にある。わずか2点の樹種同定ではあったが、ヌルデの存在は樹種集成の地域的偏在を顕在化するものといえよう。

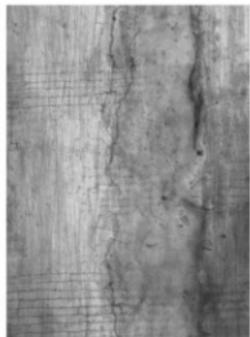
表2 樹種同定資料等の大きさ

試料	長さ (cm)	直径 (cm)	厚さ (cm)	備考
Pit 3	25.3	9.0 × 10.8		柱材
Pit 4	42.5	13.2 × 13.4		柱材
杭 1	24.4		4.1 × 4.6	
杭 3	21.6		5.6 × 6.0	樹種同定未実施
杭 4	38.3	3.2 × 3.7		

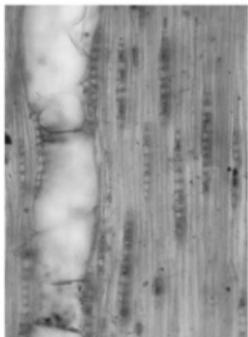
七社遺跡の木材



横断面 横断面 : 0.5mm
Pit 4 柱材 クリ



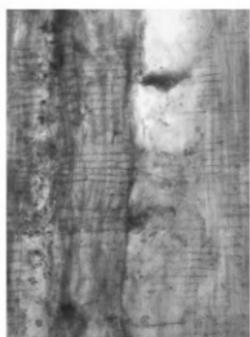
放射断面 放射断面 : 0.2mm



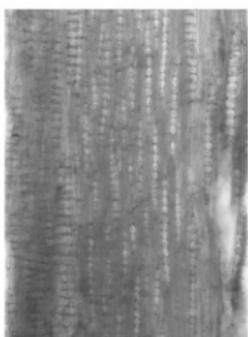
接線断面 接線断面 : 0.2mm



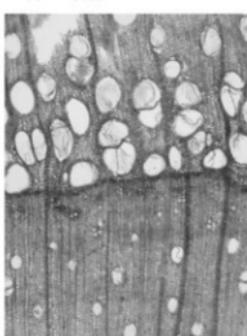
横断面 横断面 : 0.5mm
杭 4 杣材 クリ



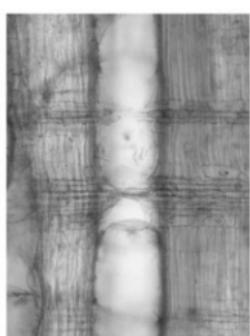
放射断面 放射断面 : 0.2mm



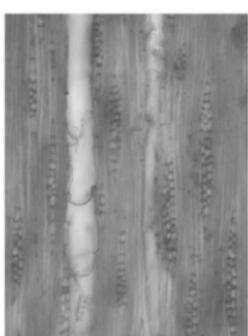
接線断面 接線断面 : 0.2mm



横断面 横断面 : 0.5mm
Pit 3 柱材 ヌルデ



放射断面 放射断面 : 0.2mm



接線断面 接線断面 : 0.2mm

第Ⅷ章 総 括

七社遺跡の調査は、多くの制約があり、遺構から得られる情報にはおのずと限界がある。一方、遺物は出土量も多く木簡など貴重なものも含まれており、当地域の歴史を考える上で有益な知見が多く得られた。そこで、はじめに出土遺物の帰属時期と特徴を明らかにし、それをもとに七社遺跡の評価付けを試み、まとめとしたい。

1 古墳時代前期の土器の時期と特徴

Ⅲ章で記したように、七社遺跡の古墳時代前期の土器は、大きく2つのまとまりとして捉えられる。ここでは、土器群の時期的な位置付けのため、新潟シンポ編年(滝沢・春日ほか2005)7期(3世紀後半頃)の縦立遺跡(坂井1983)B地区2号竪穴住居(以下、縦立B区2号竪穴と略)資料と、8・9期(4世紀前半頃)の山三賀II遺跡(坂井1989)SI1480・SI502A(以下、山三賀II SI502A・SI1480と略)資料を比較の対象とした(第20図)。なお、SI1480・SI502A資料は、甕類の特徴にほとんど差がないため同段階の資料として扱う。

比較資料の器種構成と特徴 縦立B区2号竪穴資料は、供膳形態に弥生時代後期以来の器種(第20図縦立2・18)がわずかに残る程度で、東海・畿内系などの新来器種(3・8・10・21・26)が定着しており、煮炊形態の器種が所謂「く」の字口縁甕の北陸北東部系甕が主体となっている(坂井・川村1993)。山三賀II SI502A・SI1480資料は、供膳形態に在地の器種がなく、畿内系の高杯(第20図山三賀II 21)や小型丸底甕(5)が定着しており、甕は「く」の字口縁甕主体であるものの球胴形をなす(坂井1989)。

七社遺跡出土土器の時期的な位置付け 古相としたB水路1区1号溝状遺構資料は、縦立B区2号竪穴資料と比較すると器種構成上の違いは認められないが、壺A類・F類、器台A類のつくりが華奢で小形であり、甕類が球胴・なで肩形と、より後出的な要素が多い。46の甕は、胴部の調整方法と口縁端部の形状に違いがあるが、器形と丁寧なヨコナデ調整、内面のケズリ状のハケメ調整から布留系甕の影響が考えられる。ほかの甕も球胴形の甕が主体である点を評価すれば、山三賀II SI502A・SI1480との共通点が多く、61の扱いが問題となるが8期以降に位置付けるのが妥当であろう。

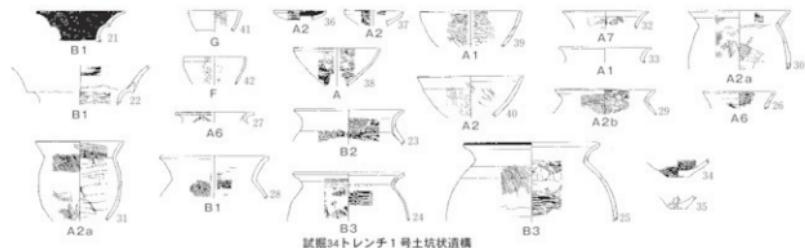
試掘34トレンチ1号土坑状遺構資料は、畿内系二重口縁壺21・22と鉢A類(39・40)を含み、甕B類が多く、甕類の口縁端部面取りが弱いといった特徴がある。鉢A類と甕類の比率、口縁端部の処理の違いからB水路1区1号溝状遺構に後出する資料とでき、8期新相~9期に位置付けておく。

一方、試掘10トレンチ包含層資料とD水路10区包含層資料は、すべてを同一時期として扱えない部分もあるが、供膳形態に在地の土器がなく、精製小形鉢が定量ある点で共通し、両資料は近接した時期の資料と捉えられる。先の資料群とは器種構成が全く異なり、器台82や鉢81が山三賀II SI502A 8・14と対比可能で、1・79の甕も華奢なつくりであることから、9期に位置付けることが可能であろう。

甕類について 七社遺跡からは特徴的な甕が幾つか出土しており、若干の考察を試みる。

甕A3類 A3a類46は、先述したように布留系甕の影響を考えてみた。一方、A3b類45は、口縁部にやや厚みを持たせて端部を細くし、ヨコナデせずにハケメで口縁部を調整するという特徴があり、胎土も砂質で雲母を多量に含みほかの甕と異なる。一般に北陸系とされる当概期の甕は、ヨコナデ調整を基本とし、胎土はシリト質のものが多い。上記の特徴、特に口縁部の形状と調整は、天王山式系または八幡山式(渡邊2001)とされる甕の特徴に類似しており、時期的な隔たりがあるが天王山式系の系譜につながるものとしてよいかもしれない。

甕B3類 B3類とした甕は、かつて能登地方で盛行すると指摘された(坂井・川村1993)ものであるが、現在では県内でも出土例が増加した。断面「逆コの字」状の口縁部の端部を擱んで内折させる特徴的な口縁部形態

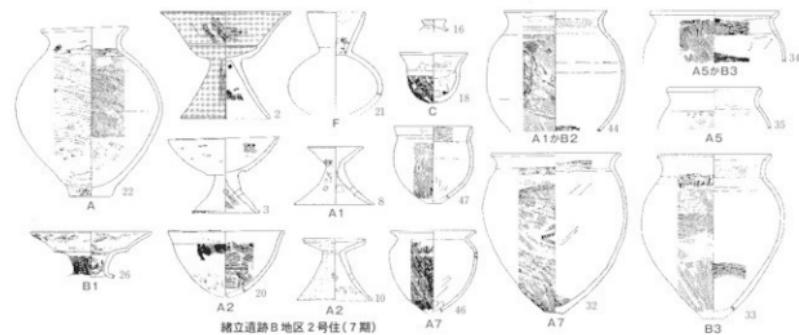


試掘34トレンチ1号土坑状遺構

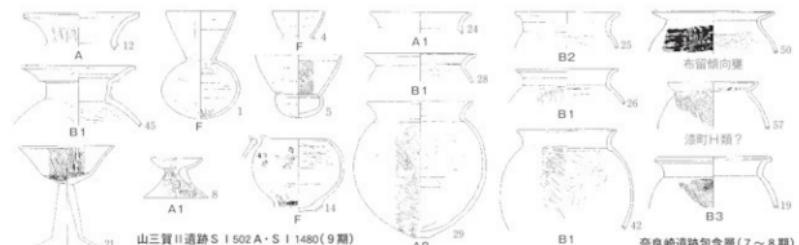
B水路1区1号溝状遺構

D水路10区包含層

試掘10トレンチ包含層



諸立遺跡B地区2号位(7期)



奈良崎遺跡包含層(7~8期)

第20図 七社遺跡古墳時代土器資料と時期対比資料 ($S = 1/8$, 遺物番号はそれぞれの報告書に対応)

であるが、新潟シンボ5期頃（3世紀中頃）には初源的なもの（緒立C遺跡SK328-211：渡辺1994、野中土手付遺跡SI01-34：佐藤2006、など）があり、8～9期頃に本例のように定形化するようである。こうした変化は、口縁端部内面のヨコナデ痕が顕著な摘み上げ口縁甕の増加（正尺C遺跡：土橋ほか2006など）と対応しており、口縁端部をシャープに摘み出す意識が働いた結果生じたものであろう。この時期は、滝沢規朗氏によれば県内に庄内形甕とタタキ甕といった畿内系甕の出土が認められるようになる時期（滝沢2007）で、B3類甕はこうした甕の模倣甕として成立し、布留系甕の影響により定形化したと理解できないだろうか（第20図 最下段右）。

2 古代の土器の時期と特徴

前章まで、七社遺跡の古代の土器は、A水路4～6区出土資料などの一群と、F水路16～17地点出土資料などの一群に分けられることを確認した。これらの資料には、それぞれ佐渡小泊窯群須恵器が定量伴う。小泊窯群須恵器は越後全域に大量流通するため、包含層資料であっても時期決定の指標となり、比較資料として有用である。このため、春日真実氏等によって編年が構築されてきた（坂井・春日1999など）が、近年その編年観と消費遺跡資料との対比に齟齬が認められるケースがあり、歴年代についても従来の年代観（春日2005・2006）に対し百瀬正恒氏から疑問（百瀬2008）が提出されるなど、見直しが必要な状況となっている。年代観については、春日真実氏による反論（春日2010）がなされたが、各資料の編年的位置付けと並行関係に幾つかの問題点がある。そこで、はじめに生産地である小泊窯跡群出土須恵器の編年案を提示し（第21図）、次に集落遺跡資料との並行関係、年代観を整理して、七社遺跡出土遺物の年代的な位置付けを試みたい。

既存の研究について 小泊窯跡群須恵器の具体的な検討は、「新潟考古」第2号紙上で坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実氏により「佐渡の須恵器」と題した論考で示された（坂井・春日ほか1991）。この中で、春日氏により小泊窯跡群須恵器の編年が整備され、下口沢窯→カメ畠1～3号窯・大木戸窯→栗ノ木沢窯→江ノ下・フスベ窯→高野遺跡という序列が提示された。各窯資料の位置付けは、器種構成の変化と、器壁の厚さ、器形の外傾度、細部のつくりの簡略化傾向が判断材料とされた。各窯の年代については、山三賀II遺跡での年代観をもとに、カメ畠窯に先行する下口沢窯を9世紀第2四半期、カメ畠窯跡群・大木戸窯を9世紀第3四半期、栗ノ木沢窯を9世紀第4四半期、江ノ下窯を10世紀第1四半期とした。その後、大木戸窯をカメ畠窯跡群に、フスベ1号窯跡を江ノ下窯に先行させる見解が提示され（川村2002・2005）、春日氏もこれを容認（春日2003）したことから、編年の枠組みに若干変更が生じたものの、現在においても春日氏による小泊窯編年が基準となっている。

問題の所在 小泊窯編年と集落遺跡資料を対比する上での問題点は2つある。一つは、下口沢窯と大木戸窯資料を同段階、カメ畠1～3号窯を同時期としたことで杯の器形変化の一貫性が見えなくなり、生産地の時期的な指標があいまいになった点。もう一つは、總体として資料の特徴をとらえずに個別資料間の形態比較にとどまる場合や、器種の出土量の違いを時期差と捉えるといった、遺構資料の比較方法や解釈の仕方にある。

本報告での器種分類 有台杯は、口径と器高指数を指標にA・B・C類に大別し、B類は底径指数と器高指数の違いで3類に細分した。杯・盤は、口縁部の形態で杯を4類、盤を2類に細分した^{注1}。

編年案の概要 小泊窯跡群須恵器の基本的な変化の方向は、有台杯A類の消滅と有台杯B類の法量分化、杯A類の2法量分化を経て、杯形器種が減少し橢形器種が増加（坂井・春日ほか1991）する器種構成上の変化と、杯類の小形化と口縁部の外傾化、底部の丸底化、薄作りが進行する器形の変化で説明できる。既存の編年との相違点は、カメ畠1～3号窯をカメ畠1号窯と2・3号窯に分離し、1号窯を後続させたこと^{注2}、カメ畠2・3号窯と大木戸窯を同時期としたこと、カメ畠2・3号窯とカメ畠1号窯の間に1段階設けたことなどである。川村氏が大木戸窯と下口沢窯を同段階と判断した杯底部のロクロケズリは、下口沢窯以降は普遍的な調整技法ではな

第2段階 古	有台杯A	有台杯B 1	有台杯B 2	有台杯C	杯A 1	杯A 2	杯A 3	杯A 4	杯A 5	杯A 1-2	有台皿・碗
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
第3段階 新	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
第4段階 新	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
第5段階 古	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95
第6段階 新	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106
	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117

第21図 佐渡須恵器等跡出土食器類の変遷表 (S = 1/8)

く器種も限定されており、時期判断の指標とはならない。また、下口沢窯の杯A類は、底径指数60後半～70前半、器高指数24前後が多く扁平・箱形器形で、有台杯B類が大形であるなど大木戸窯とは異なり、大木戸窯は器種構成・法量・器形の特徴からカメ烟2・3号窯と同時期と見たほうがよい。カメ烟1号窯を新しくした根拠は、有台杯A類がなく、杯底部が7cm台で腰部が丸みを帯び薄手である点がフスベ窯の特徴に近いことによる。カメ烟2・3号窯と同1号窯の間の段階は、両者の中間的な様相を示す資料群と捉えたものを当てた¹³。

以上の検討から、ここでは、小泊窯の須恵器の変遷を6段階に区分し、川村氏の見解(川村2005)に従いK402窯を最古とみて1段階に、下口沢窯を2段階、カメ烟2・3号窯・大木戸窯を3段階、下口沢1号窯・K344窯を4段階、カメ烟1号窯を5段階、フスベ1号窯・江ノ下窯を6段階とした¹⁴。

小泊窯須恵器の年代について 年代に関わる部分について小泊窯と消費遺跡との対応関係を簡単に述べる。春日氏は、貞観五年(863)の地震痕跡に関わるとされる积迦堂遺跡区a層・Ⅶa層資料(江口2000)、八幡林1地区II層資料(田中1994)と阿部朝臣安仁に関わるとされる木簡が共伴した胸首渦遺跡旧河道資料(渡辺2009)により、春日編年VI1期(カメ烟1～3号窯並行)の年代を857年～863年を含む頃に求めている(春日2005・2006・2010)が、これらの資料は、小泊窯資料に対比すれば、カメ烟窯群ではなく春日編年VI2・3期、本報告6段階としたフスベ1号窯・江ノ下窯に対比すべき資料である。これは、春日編年VI2・3期の基準資料であり6段階に対比できる小丸山遺跡SD4号溝資料(小池・本間1995)との並行関係においても問題はない¹⁵。論考で提示された积迦堂遺跡の資料は、層位の取り違いや資料の扱いに混乱が見られるが、遺構資料を見れば貞観五年(863)の地震と推測される噴砂に切られるⅧb層上面検出遺構中に6段階に対比できるSX2・41資料(江口2000)があり、仁和三年(887)の地震と推測される噴砂に切られるⅦ・Ⅷa層資料に6段階以降の資料を含まないことから、6段階のある時期を貞観五年とそれに続く仁和三年の地震の時間幅に収めざるを得ない。よって、上記の資料を年代の根拠とするならば、春日編年のVI1期ではなくVI2・3期を9世紀第3四半期頃に位置付けなければならないであろう¹⁶。

出土資料の年代的的位置付け A水路5・6区出土資料には、器形・口径値・器高指数から小泊窯3段階に対比可能な須恵器杯A類(88～91)と、坂ノ沢C遺跡2号竪穴・8号土坑に対比可能な土師器(95～97)がある。坂ノ沢C遺跡2号竪穴の小泊窯産杯A類は、3段階に比べてやや深身で外傾度の強いものが主体であり、4段階に対比できる。よって、A水路5・6区出土資料は小泊窯3～4段階並行となり、6段階の年代観から9世紀第1～第2四半期に位置付けられる。上記の年代は、A5区の在地産須恵器86・87の年代観とも矛盾しない。

F水路16～17地点の土器は、流路跡と推測される層からの出土である。小泊窯産須恵器杯A類(113～115・125～127・151)は、器高指数が24前後と27に分離し、底径指数50台と底径が小さく外傾度が強いものがあり、全体に丸底気味で薄作りある点は、江ノ下窯の特徴に一致し小泊窯6段階新に位置付けられる。土師器椀類は坂ノ沢C遺跡13号土坑資料に対比可能で、13号土坑の小泊窯産須恵器杯A類も江ノ下窯に比定できることから、F水路16・17地点の資料は一括資料と捉えられ、9世紀第3四半期頃に位置付けられる。共伴する在地産須恵器(110・112・152)に古手のものが含まれるが、152は同時期として差し支えない。北側調査区出土土器は、土師器椀A類(136・137)がやや古相を示すものの、F水路16・17地点資料と同様の特徴をもつものが多く、主体となる時期を9世紀第3四半期頃とすることができるよう。

3まとめ

以上の検討から七社遺跡は、古墳時代前期(新潟シンボ編年8～9期 4世紀前半頃)、平安時代前期(9世紀)とともに、ごく短期間営まれた遺跡と位置付けられる。周辺は、低湿地が広がる環境で微高地に所々浸食も見られるなど、地形的な制約から安定した居住空間が確保できず、短期間での放棄を余儀なくされたのであろう。

古墳時代前期の集落動態は、流路規制により、新潟シンボ5期(3世紀中頃)に低地の開発が本格的に開始され、集落の形成・拡大が6・7期にピークを迎えて8期に衰退する傾向が示された。また、9期を境に畿内・関東系

土器等の流入による土器様式の転換や住居形式の変化があり、この時期に越後内部での地域差が顕在化することを指摘している（滝沢 1995）。古墳時代の七社遺跡は、県内の古墳時代前期の転換期にあたる8～9期頃に遺跡が営まれており、明確に畿内系と呼べる土器は少ないものの小形精製鉢類が多いなど土器構成上の特徴からも、山三賀Ⅱ遺跡同様9期前後に成立する集落と位置付けることが可能であろう。近年前期古墳として注目されている城の山古墳（胎内市）は、直線距離で北6kmに位置し、築造時期もおおむね同時期である（水澤 2010）。七社遺跡が、当地域での前期古墳の出現と絡む社会情勢の変化とも無縁ではない可能性を示しているといえよう。

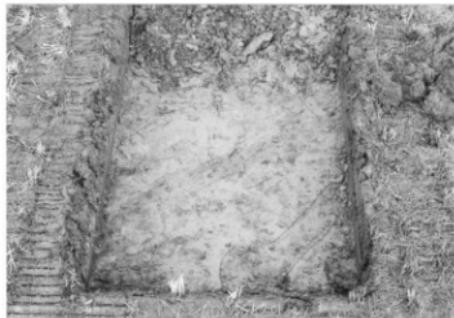
一方、平安時代前期については、遺跡の消長と九九本簡の出土が注目される。九九本簡は、流路と推測される層から一括性の高い多くの土器、墨書き土器と共に作られており、出土地点と特異な出土状況から、廐棄儀礼に関する資料の可能性がある。県内の九九本簡ではもっとも新しい時期の資料であり、廐棄方法や九九本簡の意味も含めさらなる検討が望まれよう。なお、第V章での浅井氏の解説文に、「九九を用いて仕事をする必要のある（下級）官人が勤務する場としての官衙などの存在を想定できるが、本木簡のほかには直接官衙を示す資料に乏しく（略）、本遺跡を官衙そのものと位置付けることは現時点では難しい」とあるように、土器の年代観と調査所見からも、七社遺跡は、限られた空間に小規模な集落が半世紀程度の短期間営まれた遺跡と考えざるを得ず、官衙関連遺跡とは評価しにくい。むしろ、「少日御船米五斗」と記された本簡が出土し、国司の関与が指摘される蔵ノ坪遺跡（小林・相沢 2002）など、近在する公的機関が周辺の集落をどのように管理したかを、こうした遺跡から考えていく必要があろう。なお、古代の遺跡の下限が小泊窯6段階に並行する点は、家ノ内遺跡（鈴木・菊池 2006）や蔵ノ坪遺跡など周辺の遺跡も同様であり、6段階を貞觀五年（863）と仁和三年（887）の地震前後に比定できるとすれば、当地域の平安時代前期の遺跡の衰退（第3回遺跡の時期）が、社会情勢の変化ばかりではなく、地震を契機としておこった可能性も考えられよう。塙津潟（紫雲寺潟）の形成が、地殻変動後の9世紀末頃と推測され（高浜・ト部 2004）、遺跡廐絶後にガツボ層が堆積して全域が湿地化する状況から、今後、貞觀五年に続く数回の地震が当時の県内の遺跡に及ぼした影響も含め、当地域の古代の遺跡を多角的に検討していくことが望まれる。

＜脚注＞

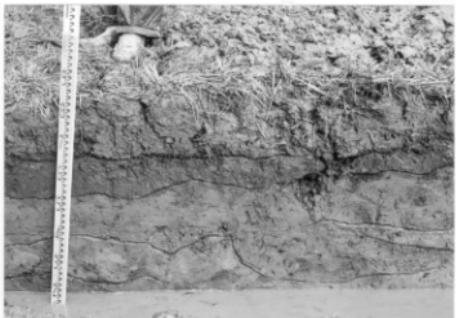
- 注1 有台杯A類は器高指数30前後、有台杯B類はA類より相対的に大形で器高指数40以上とし、底径指数と器高指数により1～3類に細分した。有台杯C類は、無蓋と考えられるもので口径11cm以下のものとした。杯と皿は、口縁部の形状で分類し、杯は口縁端部内折口縁をA1類、内湾口縁をA2類、外側口縁をA3類、外反口縁をA4類に、皿は外側口縁をA1類、有段口縁をA2類とした。
- 注2 徒末は、カメ烟1～3号室の器種構成の違いを、同一時期内の分業体制の結果としている（坂井・春日ほか 1991）。
- 注3 有台杯A類の消滅と有台杯B1類の法量分化、各器種の小形化の進行と底径の縮小、外側器形の増加を指標とした。
- 注4 各段階の指標は、次のとおりである。1段階は、杯A類の底部全面ロクロケズリ調整の卓越。2段階は、大形の有台杯B類の存在（1法量）と杯A類のロクロケズリ調整の消滅。3段階は、有台杯B類の小形化、杯A類の深身化と2法量化。4段階は、注3に同じ。5段階は、薄作りの進行と杯A類の底径の縮小、小型化を指標とした。南のそで窯（川村 2005）が同段階と考えている。6段階は、盤の消滅、楕円形（器種）の増加、杯A類の2器種化（底径指数小・外傾度強・外傾度弱）と丸底器形の増加である。詳細は、準備中の別稿を参照。
- 注5 他の遺跡では、下ノ西遺跡SE669資料（田中 2003）が6段階古に、日本遺跡SI385・386資料（今井 2007）が6段階新に対比できると考えている。
- 注6 百瀬正恒氏は、災害痕跡に伴う資料の扱いについて「地震後の再建、土器群の廐棄の時間を想定すると、（地震前の遺物を）同時代や1形式内に収めることには困難がある」と指摘している（百瀬 2008）。しかし、地震断層・噴砂を覆う層であっても、生活面に連続して堆積した層であれば、そこに含まれる遺物に遺跡存続時の遺物が含まれるのは当然のことである。地震前後の堆積層から出土した遺物が1型式内に収まるのであれば、両者を同時期として扱い、遺跡存続期間のある時間の年代を示す資料とするのが妥当であろう。

<引用文献>

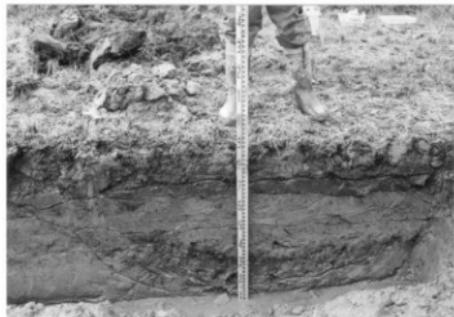
- 今井さやか 2007『日本道路 第3次調査』新潟市教育委員会
- 江口友子 2000『駿遊堂道路』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2003『消費遺跡出土佐渡小泊須恵器のクロロ回転方向』『研究紀要』第4号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005『越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2006『新潟市駿遊堂道路出土土器について』『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会
- 春日真実 2008『越後における古墳時代～中世の柱材について』『新潟考古』第19号 新潟県考古学会
- 春日真実 2010『貞觀五年の地震痕跡再考』『三面川流域の考古学』第8号 三面川流域を考える会
- 加藤 学・猪狩俊哉 2004『第V章 遺物 5木製品』『青田遺跡 本文・觀察表編』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川上貞雄 1982『貝屋須恵器』新潟県加治川村教育委員会
- 川村尚 2002『佐渡郡羽茂町小泊窯跡』『新潟県考古学会第14回大会研究発表会要旨』新潟県考古学会
- 川村尚 2005『小泊窯跡群1』佐渡市教育委員会
- 小池邦明・本間桂吉 1995『新潟市小丸山遺跡』新潟市教育委員会
- 小林昌二・相沢央 2002『第V章 まとめ 2遺物 C 2号木簡について』『藏ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林昌二・相沢央 2004『新潟県内出土古代文字資料集成』新潟大学大城の文化システムの再構成に関する資料学的研究プロジェクト
- 小林弘 2004『資料編 第II章高山寺窯跡』『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 坂井秀弥 1983『IV 遺物 3古式土器』『緒立遺跡発掘調査報告書』新潟県黒埼町教育委員会
- 坂井秀弥 1989『第V章 出土遺物 3奈良・平安時代』、『第VI章 まとめ』『山三賀II遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・春日真実ほか 1991『佐渡の須恵器』『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993『古墳出現期における越後の土器様相—越後・会津・能登—』『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』磐越地方における古墳文化形成過程の研究者グループ
- 佐藤友子 2006『野中土手付道路・砂山中道下遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木 晚・菊池 豊 2006『家ノ内遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 高浜信行・ト邵厚志 2002『湖底に沈んだ礎文道路—青田遺跡の立地環境』『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」川辺の縄文集落』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
- 高浜信行・ト邵厚志 2004『第1章 立地・地表環境 1青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程』『青田遺跡 関連諸科学・写真団版編』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規則 1995『古墳出現期における集落の動向』『研究紀要』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規則 2007『新潟県におけるタキヤ・布留系について』『研究紀要』第5号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規則・春日真実ほか 2005『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 田中 潤 1994『八幡林遺跡』新潟県和島村教育委員会
- 田中 潤 2003『下ノ西遺跡IV』新潟県和島村教育委員会
- 戸根ひろ郎・加藤学ほか 1986『付編二 生産遺跡 真木山窯址群』『新潟県史』通史編I原始・古代 新潟県
- 土橋由理子・加藤学ほか 2006『馬見坂遺跡、正尺A遺跡、正尺C遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中川成夫・土井義雄ほか 1973『狼狽窯址群の調査』新潟県葦神村教育委員会
- 新潟市埋蔵文化財センター 2008『大沢谷内遺跡現地説明会資料』新潟市
- 水澤幸一 2009『草野遺跡3次』胎内市教育委員会
- 水澤幸一 2010『城の山古墳群出土土器の検討』『池上悟先生還暉記念論文集』池上悟先生還暉記念会
- 百瀬正恒 2008『新潟平野における中世土器の成立』報告の概要』『北陸中世のみち』北陸中世考古学研究会
- 渡邉朋和 2001『第V章 まとめ 1 弥生土器 B八幡山式土器の設定』『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡辺ますみ 1994『諸立C遺跡発掘調査報告書』新潟県黒埼町教育委員会
- 渡辺ますみ 2009『胸首器 第3・4次調査』新潟市教育委員会
- 渡邊美穂子・田中耕作 2001『坂ノ沢C遺跡II(平安時代編)』新発田市教育委員会



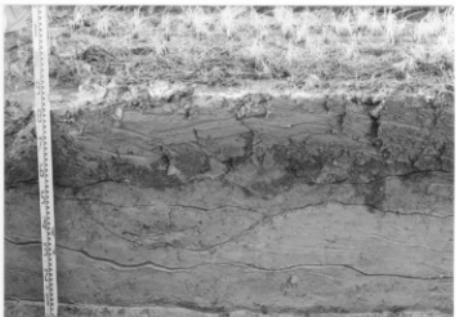
試掘 3 トレンチ 遺構検出（西から）



試掘 10 トレンチ 東壁土層（西から）



試掘 11 トレンチ 西壁土層（東から）



試掘 22 トレンチ 北壁土層（南から）



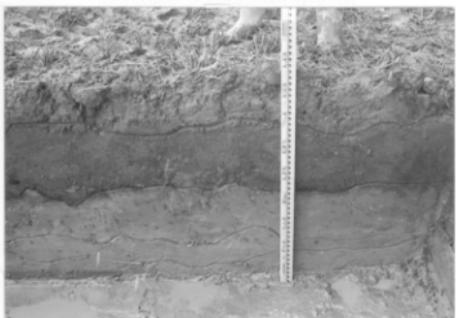
試掘 27 トレンチ 遺物出土状態（東から）



試掘 28 トレンチ 北壁土層（南から）



試掘 32 トレンチ 遺物出土状態（北から）



試掘 34 トレンチ 北壁土層（南から）

図版2 工事立会



A 水路の掘削（南から）



B 水路の掘削（北から）



B 水路1区 西壁土層（東から）



C 水路の掘削（西から）



D 水路の掘削（西から）



E 水路の掘削（東から）



F 水路 16 地点の掘削（南から）



F 水路 16 地点の西壁土層（東から）



11 レンチ 調査風景（北西から）



2 レンチ 北西壁土層（南東から）



3 レンチ 南東壁土層（北西から）



5 レンチ 南東壁土層（北西から）



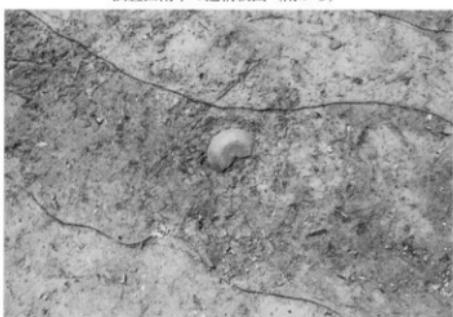
10 レンチ 南東壁土層（北西から）



調査区南半の遺構検出（南から）



1～3号溝とピットの検出（南東から）

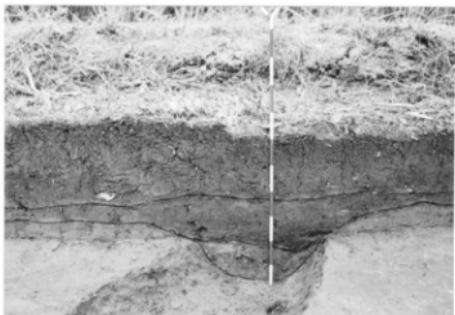


1号溝の墨書き器（149）出土状態（北東から）

図版4 本調査（調査区南半）



1・2号溝の土層（南から）



3号溝の土層（南東から）



1～3号溝とピット（南東から）



1～3号溝とピット（北から）



調査区南半の遺構（南西から）



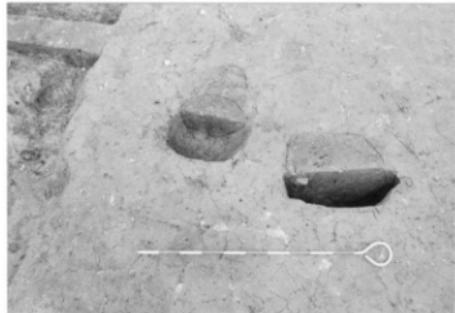
調査区南半の遺構（北東から）



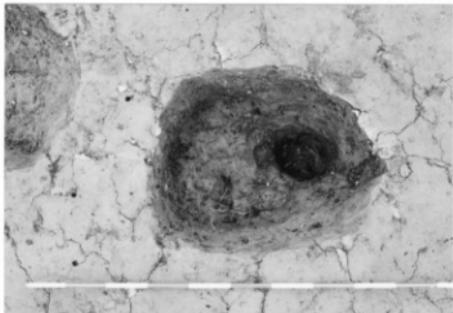
土留め状の遺構（南東から）



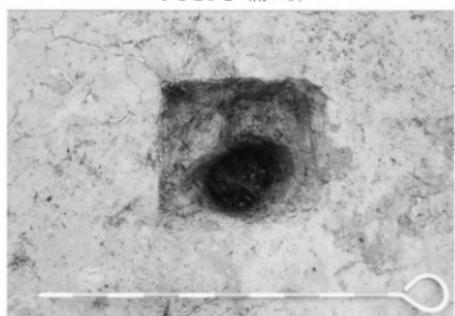
土留め状の遺構と土層（東から）



P 1とP 2（南から）



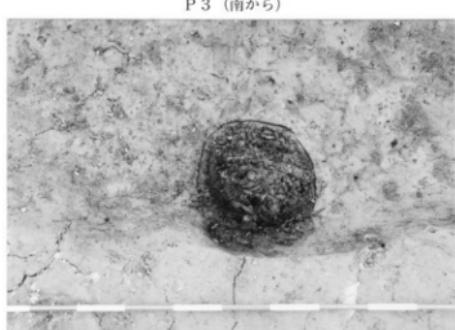
P 1（南から）



P 3（南から）



P 3の柱（南から）



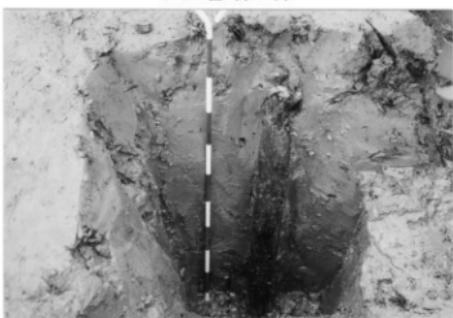
P 4（西から）



P 4の柱（東から）



杭1～3（西から）



杭4（南から）

図版6 本調査（調査区北半）



遺構実測作業（北東から）



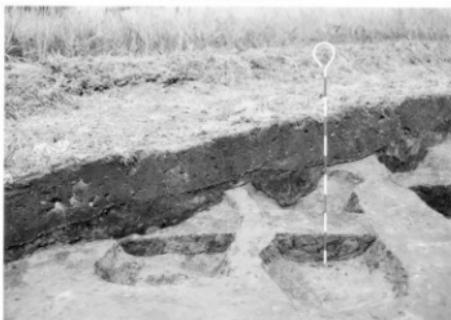
畝状小溝全景（北東から）



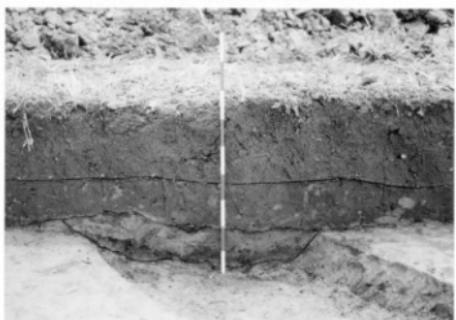
4～7号溝（南から）



4・5号溝の土層切合い（南東から）



6・7号溝の土層（南から）



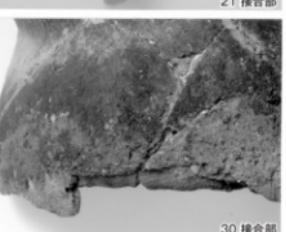
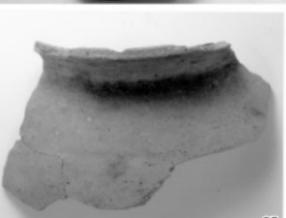
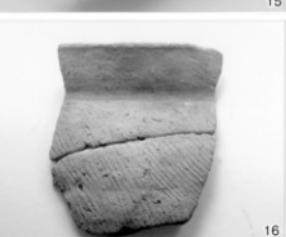
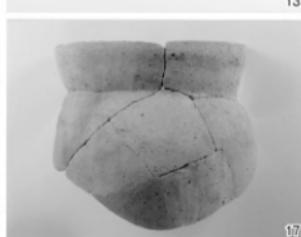
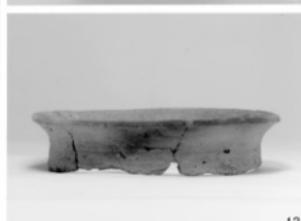
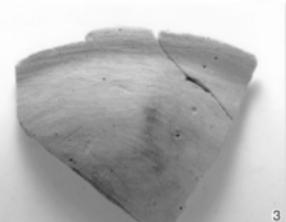
8号溝の土層（北西から）



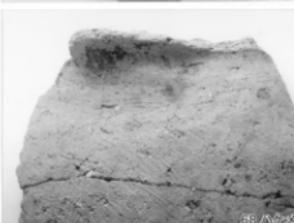
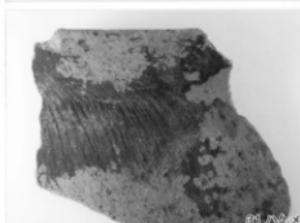
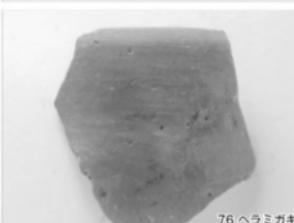
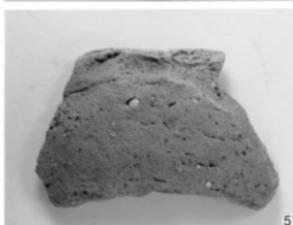
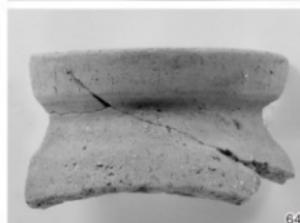
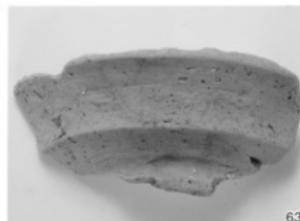
9号溝の土層（西から）



畝状小溝の完掘（南西から）

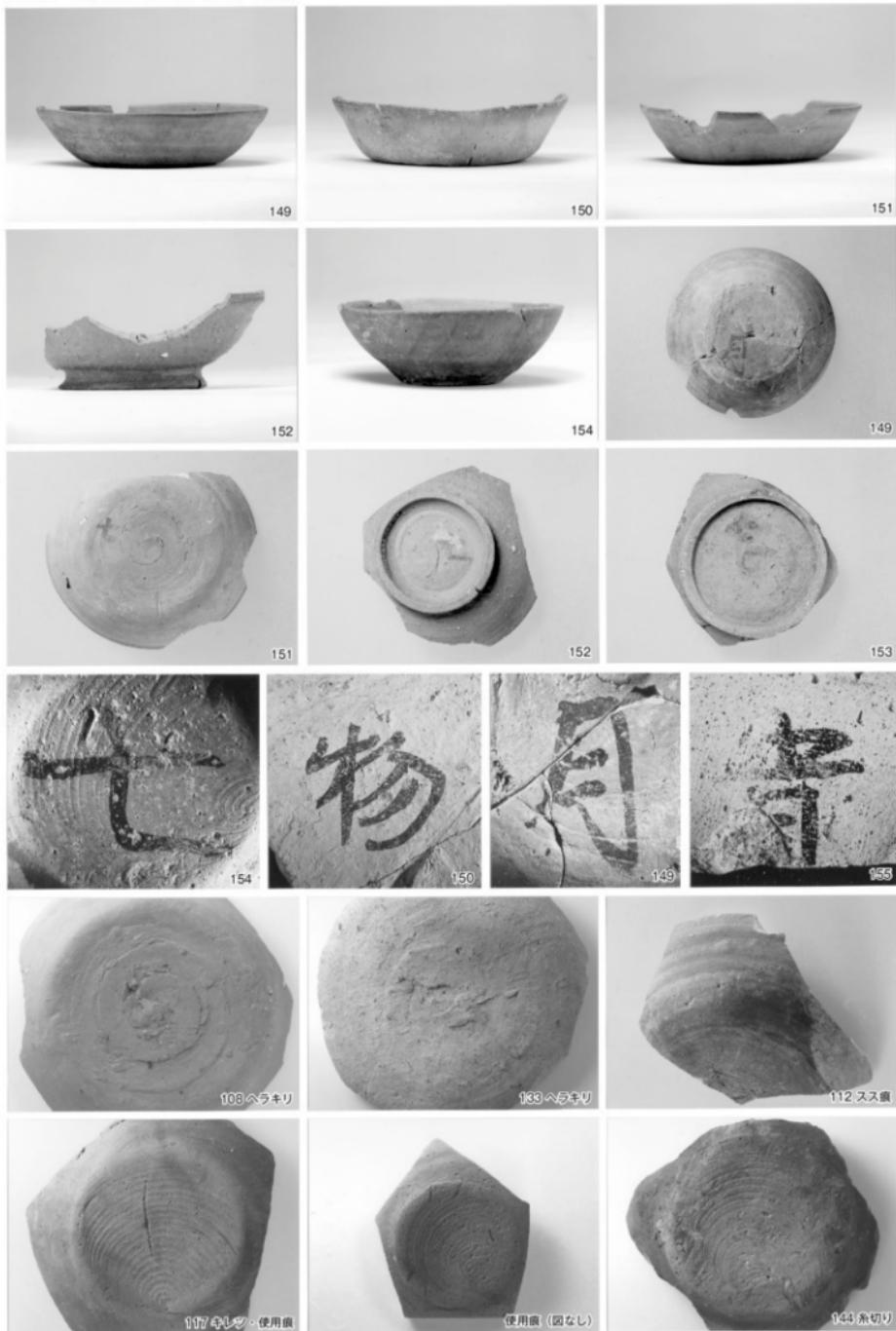


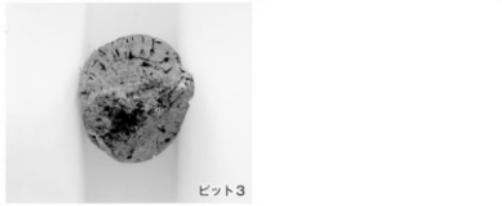
図版8 古墳時代の土器（2）





図版 10 黒書土器と杯底部の調整・使用痕





報 告 書 抄 錄

ふりがな	ななやしろ いせき							
書 名	七社遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	県営ほ場整備事業（加治川地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV							
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告 第42							
編著者名	田中耕作・笛澤正史・浅井勝利・株式会社古環境研究所							
発 行	新発田市教育委員会	平成 23 (2011) 年 3 月 18 日		市町村コード		1 5 2 0 6		
事 務 局	新発田市教育委員会 教育部 生涯学習課 〒 959-2323 新潟県新発田市乙次 281 番地 2 TEL.0254-22-9534							
報告書情報	A 4 判 横組 1段 本文 40 頁 写真図版 11 頁							
所収遺跡	所在 地	遺 跡 No.	地形図	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
七社遺跡	新潟県新発田市住田 525-1 番地ほか	687	1/2.5 万 新発田	37° 59' 23"	139° 22' 07"	20081003 ～ 1008 (確認調査)	39.6 m ²	県営ほ場整備 事業
遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な 遺 物				特記事項
七社遺跡	遺物包含地	古墳時代前期		土師器				
		平安時代前期	溝・ピット 護岸状遺構？	須恵器・土師器・黒色土器・ 墨書き土器・木簡				
<要約>								
<p>七社遺跡は、桶形山脈西麓に近い標高約 7 m の沖積平野の微高地に立地する。周辺は、未分解腐植土が厚く堆積する湿地が広がり、一部微高地にも泥食が及んでいる。調査の結果、古墳時代前期と平安時代前期の遺構・遺物を検出した。後者は、「九九木簡」の出土があり官衙との結びつきが示唆されるものの、遺跡の消長と地形的な制約等から判断して官尚関連遺跡との積極的な評価は難しい。この時期の村落經營が多様であった可能性が考えられる。なお、本遺跡の時期的位置づけと遺跡間比較を行うために、時間軸の再構築を行った。</p>								

七社遺跡発掘調査報告書

県営ほ場整備事業（加治川地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 IV

発 行 平成 23(2011)年 3 月 18 日

新発田市教育委員会

新潟県新発田市乙次 281 番地 2

印 刷 株式会社 天野印刷